

オウシーヤ遺跡A区, B区発掘調査概報

藤井秀夫* ・岡田保良** ・松本 健**
小口裕通*** ・八木和美*** ・沼本宏俊***

I. A 区

はじめに

ハディーサ Haditha 地域のオウシーヤ遺跡A区, B区 'Usiyeh, Area A and Area B の調査は, カディシーヤ・ダム建設によって水没する遺跡群の救済事業の一つとして, 国士舘大学イラク調査隊とイラク共和国古物遺産庁との協力のもとに, 1982年11月から1983年12月まで継続して実施された。

調査隊の構成は, 藤井秀夫 (研究代表者, 国士舘大学イラク古代文化研究所), 岡田保良, 大沼克彦, 松本健, 小口裕通, 八木和美, 沼本宏俊 (以上同研究所), 横倉雅幸 (国学院大学大学院), 糸賀昌昭 (アジア経済研究所) からなる。またイラク古物遺産庁の調査官であるマジット・モハンメッド・アブドゥラハマーン, イスマイル・エブラヒム・シャビーフ, カハタン・アブドゥラ・ハミッド, マハディー・サレーハ・アジーズ, などが調査隊に加わり, 彼等の協力のもとに調査はすすめられた。

なお, 調査隊員の一人である糸賀昌昭氏は, 1984年12月10日に急逝された。心から哀悼の念を表したい。

ハディーサ地域において, 1981年のテル, アブ・ソール Tell Abu Thor の発掘調査¹⁾, また1982年のライヤーシ Rayyash 遺跡の調査²⁾ に引き続き, 1982年11月から行われたこのオウシーヤ遺跡の調査は, イラク側と日本側が共にその費用を分担した。日本側の分担した調査費用は, 国士舘大学からの資金を主とし, 日本私学振興財団からもその一部を助成していただいた。

当初の計画は, 本調査隊が1982年の5月から7月にかけて実施したライヤーシ遺跡の地形測量, 遺構, 遺物の分布調査に基づいて, その発掘調査を行う予定であった。しかるところ, イラク古物遺産庁のアーデル・ナジ博士とムニエル・ユーセフ・タハ博士の強い要請により, 既にイラク隊が発掘をすすめていたオウシーヤ地域を視察した結果, 調査地をライヤーシ遺跡からオウシーヤ遺跡へと変更した。

この調査にあたっては, 物心両面に亘り惜しみなき援助をいただいたイラク古物遺産庁長官, ムアイアッド・サイッド・ダメルジ博士, また調査期間中深い関心を寄せ, 御支援下されたイラク西部地域の調査総局長であるムハンメッド・バーケル・カードゥム博士, 及びハディーサ地域の責任者であるラーティブ・アリ・ファラグ氏をはじめとするイラク古物遺産庁の方々に深く謝意を表したい。

また, 現地調査及びこの報告の作成にあたっては, 広島大学の吉川守教授 (シュメール言語学) 及び当時同大学院生であった小池やよいさんより多くの助言を得た。そしてこの報告の編集には横倉雅幸氏の, また図面作成においては, 川俣昭子さんの協力でとることが大きい。

* 国士舘大学イラク古代文化研究所教授 ** 国士舘大学イラク古代文化研究所講師 *** 国士舘大学イラク古代文化研究所助手

1. オウシーヤの位置と環境

オウシーヤは、ユーフラテス川右岸のハディーサから北西約 30 Km, アナ Ana から南東約 30 Km の、ほぼ両町の中央、すなわち北緯 $34^{\circ}20'00''$, 東経 $42^{\circ}07'30''$ に位置する (Fig. 1)³⁾。

オウシーヤの対岸東方にはカナダ隊が調査を行ったヤミニーヤ Yaminieh 遺跡, 南東のユーフラテス川の中には、ポーランド隊が調査を行ったビジャーノ島 Bijan island を望むことができる。

現在、川沿いでは、ジャガイモ、トマト、スイカ、タマネギ等の栽培が行われている。そして後背地及びワジ沿いでは、ところどころに、サボテン科等の植物が観察された。

ユーフラテス川両岸には、数百メートル毎に設けられた水車（ナウル）の跡が数多く残り、この水車を利用した灌漑農耕がかつて川沿に盛行した事実を今にとどめている。

オウシーヤは、ユーフラテス川の蛇行により突き出した南北約 1200 m, 東西約 1000 m の広大な範囲を有する遺跡である (Fig. 2-a)。その最も高い地点は南西部の A 区近傍（海拔約 137.5 m）であるにもかかわらず、北東部の比較的低い地域に位置する比高約 10 m の独立丘（最頂部は海拔約 137 m）マウンド・オウシーヤがひととき高く目立つ。この遺丘は、イラク隊によって発掘調査が実施された。このマウンドのすそをとり囲むようにして、低い帯状の高まりが南西側に巡っている。多分これは壁状の構築物の遺構であろう。これを Wall A とした (Fig. 2-a)。

また現在の地表面には大小の角礫の集合が、蛇行した川筋をつなぐかのように、一定の幅をもって線状に南北に走り、全長は約 1200 m に達する。これを Wall B とした (Fig. 2-a)⁴⁾。その他オウシーヤには、イラク隊が発掘調査を行った多数の埋葬遺構が点在している。我々が選んだ発掘区域は、A 区と B 区である。いずれもオウシーヤの中では、南西部の最も高い地域に位置し、Wall B の外側に接している。既にイラク隊により完掘されていた、初期王朝第Ⅲ期に属する墓⁵⁾とされる遺構もこの Wall B に外接する。なお、A 区の中心部には、帯状礫群が馬蹄形に広がっている。これを Wall C とした (Fig. 2-b)。

2. 発掘調査

(1) 層位と遺構

表層から地山までの堆積は、40 cm 前後である。地山は天然石膏の結晶を含む硬い赤褐色土で、その下層は厚い礫層である。A 区の中心部周辺を除いて、ほとんどの場所で表層直下に地山を確認した。この A 区は、風蝕作用が著しいため、いわゆるテル状に発達した遺跡ではなく、遺構は平面的な広がりをもつにすぎない。また、かなりはげしく後世の攪乱をうけていたこともあって、各遺構間の関係を層位から考察することは困難であった。

調査は、まず最初に遺構の範囲と層位を確認するために、3 本の試掘溝を設けることから始めた。後にそれを 10 m×10 m のグリッド・プランに基づいて拡張し、最終段階では地下式石組遺構を中心として調査を実施した。

調査の結果、主に次のような遺構を確認した (Fig. 3)。

- (i) 地下式石組遺構
- (ii) 配石遺構
- (iii) 石膏張の床 (F1a, F1b)
- (iv) 石積みによる階段と石膏張の床 (F2, F3), ピット (P1, P2a, P2b, P3)

(v) 排水施設 (D1, D2, D3)

(vi) Wall C

(vii) Wall B

(i) 地下式石組遺構

この遺構の初期の形態は、約 6m×7m、深さ約 2.5m の矩形掘り込みの中に、石積による 5.5m×6m の平面規模をもつものである。石積壁と掘り込みの側面との間には練土が認められるが、南西側には掘り込み面との間に約 1.3m 幅の空隙があった。ここには大礫が一面に堆積していた。石組の内部は、5室に分かれ、各室を Room N (RN), Room E (RE), Room S (RS), Room W (RW), Room M (RM) と名付けた。これらの室は、全体の構造上から南西部、北東部、の二つのグループに分けられる (Fig. 4-a)。

南西部分は、RS, RW というそれぞれ独立した2室からなる。両室共にその南西側に入口を有し、RS と RW は石組の中軸線に対して対称形をなす。また、RW の天井石は検出されなかったが、入口部は保存状況がよく、迫り出した構造をもっている。他方 RS の入口の上方は、ひどく破壊をうけていたが、RW と RS が左右対称形にあることから考え、RS の入口も RW 同様に迫り出し構造であったと考えられる。RW 入口部の側壁には石膏による上塗りの痕跡を認めるが、正面壁には^す珣を含む土の上塗りのみであった。

北東部分は、RN, RE, RM の3室に分けられるが、各室は相互に連結され、合わせて一室と見ることができる。この部分への入口は、天井石をかいていたこと、側壁に塗られた厚い石膏が屋上面まではみ出して塗られていたことなどから、RE の南東隅の天井部と考えられる。RN, RE の天井石は構築当時の様子をとどめていた

しかし、この石組遺構の大部分は、構築後の数回にわたる破壊と修復、再利用がなされている (Fig. 4)。最初の構築時を第1期とし、最終的に破壊を受けるまでの特徴的な変遷を各室ごとに記述すると次のようになる。

Room N (Fig. 4-a, b, Fig. 5-1, 4)

第1期：床面 (NF1) に、礫層の掘り切り面を利用する。

第2期：第1期の床面 (NF1) より数 cm 上昇した面に石膏張の床 (NF2) をつくり、かつ側壁にも灰白色の石膏の上塗りを施す。

第3期：第2期の床面 (NF2) から更に約45cm 上昇した面に厚い石膏張の床 (NF3) を築き、側壁にも灰色の厚い石膏を上塗りする。また RM との間に間仕切り施設と考えられる痕跡が認められる。

第4期：第3期の床面より更に上の面に石膏張の床を設ける。

石膏張の床面は、すべての時期のものが破壊をうけていた。これは主として、側壁ぎわに残存する床面の一部によって確認できる。側壁の石膏による上塗りも破損が著しいが、塗った回数を数える事ができる十分な残存状況を呈している。この室の埋土は、下から河原石、石膏片を含む砂の層、石膏片と小礫を含む層、中礫と大礫の散乱層、中礫、小礫、河原石及び石膏片を多く包含する白色がかった土の層、天井石直下のこまかい砂の薄い層という堆積であり、全面に天井石が残っていたのにもかかわらず、室内には礫の堆積が著しい。RWとこの室の間の境壁上部が崩壊していることから、この堆積は主としてそこからのものであろう。第1期から第2、第3、第4期と時を経るに従って床面が上昇し、天井面と床面との間の空間は狭くなっていく。

Room E (Fig. 4-a, b, Fig. 5-2)

第1期：掘り切り面が床面 (EF1) である。

第2期：第1期より少し上昇した面に石膏張の床 (EF2) を作る。また石膏による数回にわたる壁の修復を

行う。

Room M (Fig. 4-a, b, Fig. 5-2)

第1期：掘り切り面を床面 (MF1) とする。

第2期：石膏で壁の上塗りを施す。

第3期：上昇した床面 (MF3) に厚い石膏を張り、この室のコーナーに、ベンチ状の台 (B) をつけたす。

第4期：新しい仕切り壁 (Wa) を付設する。

第3期の前にはかなり激しい破壊を受け、RS との境壁もこの時期に崩れたものと考えられる。このことを裏付けるかのように、第3期の床 (MF3) の下には遺物が著しく散乱していた。また、第3期と第4期の間に再び大きな崩れがあったため、第3期の床面上には、遺物を含む砂と小礫がかなり堆積している。天井石もこの時期に崩れたと考えられる。しかし、RN とは異なりその後の攪乱も、石膏張りの床面まで破壊が及ばず、第3期の床面はほぼ完全な形で残っていた。第4期に至り、その堆積の上にREとこの室を遮断するように仕切り壁 (Wa) が付設される。しかし、この仕切り壁 (Wa) は、RE側の面のみ整っていて内側の面はふぞろいである。すなわちこの時期には室として機能を失なったため、この仕切り壁 Wa を付設したと考える。

Room S (Fig. 4-b, Fig. 5-2, 3)

第1期：掘り切り面を床 (SF1) とする。

第2期：第1期の床面より約 10 cm ほど上昇した面に石膏張の床 (SF2) を設ける。

第3期：RM との間の境壁が崩壊した後、その境壁のかわりに、石をたてて石膏でとめた仮壁 (Wb) をつくる。

第4期：崩れた壁の礫上に、石膏張の床 (SF4) を平らに張る。ただし、これは室の北西部分 1.5m×0.7m の範囲に限られる (Fig. 4-6)。

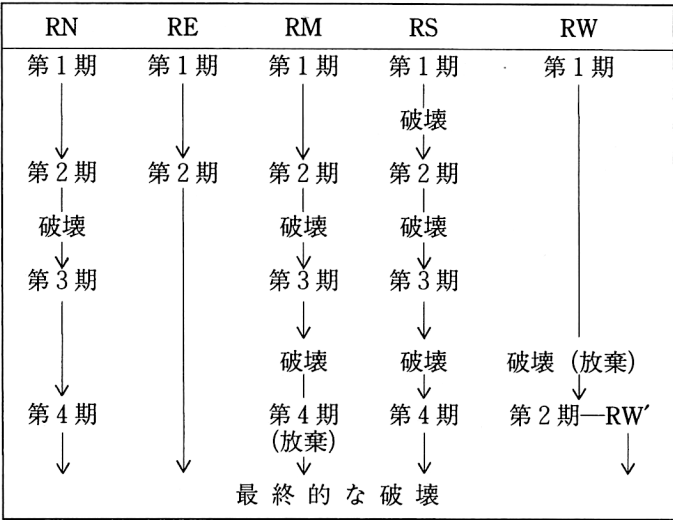
RS の側壁は、北西部を除いて他の室に比べて崩れがはげしく、南東側の側壁では 1m の残高を示すのみである。また、第1期の入口前の空間部分は、第4期以前の崩壊礫の厚い堆積によってその入口がふさがれ、その後この室は、その様相を全く変えたかたちで利用された。

Room W (Fig. 4-b, Fig. 5-1, 3)

第1期：掘り切り面を床面 (WF1) とする。この床面の一部には、^{すき} 切を含む土を塗っている痕跡が認められた。

第2期：室の入口から外にかけて、崩れ落ちた大きな礫が約 90 cm の厚さで堆積した後、これを床として利用し、その上に、石積による壁を入口の内壁に接して付設する。そこで、RW の入口から外へ、掘り切り面にかけて造られたこの室を RW' とする。RW' の側壁は、RW の迫り出しの側壁の一部を利用して、石が直立的に積み上げられている。他方、RW 内においては、室外で認められた崩壊礫の堆積はなく、この堆積と同じ面まで小礫を含む砂質土の堆積があり、その上に、RW を埋めるかのように、大きな礫の堆積があった。この堆積によって、RW は室としての機能を失い、付設された室 RW' のみはその機能を果していたと考えられる。

各室ごとの修復、破壊、再利用の過程は以上の通りである。ここにその要約として、各室間の時期的相互関係を次のような一表にまとめてみた。これは各室の堆積状況、そして、遺物の出土状況、残存していた石膏張の床と側壁の状態を比較して、推定したものである。



(ii) 配石遺構

地下式石組遺構の南西方向に、一つもしくは数個の石からなる組石が数メートルおきに配列した遺構である (Fig. 3)。これらの組石の範囲は、17m×10m の方形を呈する。その南東部では、既に崩壊した地下式石組遺構の上にも、組石を確認しており、このことから、この配石遺構が地下式石組遺構より新しいという証左を得ている。またこの遺構の西隅には、壁と思われる石積みを認めたが、わずか 2.5m の長さが残るだけで、全体のプランは不明である。

更に、この遺構の南西側には、石を溝状に並べた遺構 (D1) を認めたが、遺構の保存状況が悪く、またこれに関連する遺構が残存していないこともあって、その機能は明らかでない (Fig. 3)。

(iii) 石膏張の床 (F1a, F1b)

配石遺構の北西部外側に沿い、2カ所に検出した石膏張の床がこの遺構である。石膏張の床 (F1a) は、配石遺構の北西部外側に、幅約 3m、長さ 12m の残存範囲 (Fig. 3) を有するが、他方、石膏張の床 (F1b) は、その東部外側に、わずかな残存範囲を示すのみである。

なお、石膏張の床 (F1a) の南西端において、この床を切り込んでいる掘り込み P1 を確認した。石膏張の床 (F1a) は、この掘り込み P1 よりも古い遺構である (Fig. 3)。

(iv) 石積みによる階段と石膏張床 (F2, F3), ピット (P2a, P2b, P3)

石の周壁を伴う石膏張り床 (F2) と、その東側に平石を 4 段に組んだ階段、更にその階段の前方の両脇にピットを配し、扇形を呈する石膏張の床 (F3) などが、この主体をなす遺構である (Fig. 4-C)。床 (F3) は、左右の両側が小塀^{フエンス}の基礎石と推定しうる石列で縁どりされており、それらの上に小礫を積み上げ、練土で固めた石塀があったと推定している。なおその両脇に配されたピット P2a, P2b は、共に約 2.3m×1.7m の大きさで、1.6m の深さを有する。この二つのピットの埋土は、緑褐色の泥土を詰めただけでほとんど遺物、礫などを包含せず、また何かを埋蔵したという痕跡もない。従って両ピットは、この緑褐色土を入れるために掘られたものであると考えざるを得ない (Fig. 4-C)。

ピット (P2a) の南西に接した P3 は、経約 0.4m、深さは約 1.2m である。その内壁は、石灰岩及びバサルトの礫をめぐらせ、刎入りの練土で固めている。また、その底に、バサルト製の半壊の石臼を確認した (Fig. 4-c)。

床 (F3) の北側と東側には、練土で固めた中小の石灰礫の広い堆積があり、これらの石灰礫は、北側では、ピット P2a と P3 を覆い、東側では、特に床 (F2) の周壁から東方向に分布している。これらの石灰礫は、F3に伴う小堀と F2 の周壁が崩壊したものと考えられる。

階段を登った位置にある石膏張の床 (F2) の下には、更に 2 枚の床面を確認した。この中で最も古い床は、地山直上に、小石をたたきしめた床を伴う石敷である。この石敷は、周壁が円弧を描くのに反して、直線状に敷かれ、地下式石組遺構の掘り込みに向ってゆるやかな傾斜をもつ。このことは、この床が、地下式石組遺構の最終機能時あるいはそれ以後に設けられたことを示唆している (Fig. 4-b)。

これに対し、その上の床は、下の床の石敷面の一部を利用かつ傾斜を修正し水平な床面とするため、粗く、しまりのない卵色の土を充填し、その上に質不良の石膏を施している。同時にこの床面の外側にバサルトと石灰岩の礫を石膏で塗り固めた周壁が造られる。これが、階段遺構に伴う最初の床 (Fig. 11-4) で、この時の階段は地山を切り込んで施設した 3 段だけである。また、この第二の床の上に、厚さ 15 cm 程の赤橙色の土をつき固め、石膏張の床 (F2) を築いている。この時、階段は、1 段分高くするために、地山の上に数個の基礎石を置いて、最上段の石を 1 枚付加し、4 段にしている。この階段の西側に位置する排水溝 D2 (Fig. 3) は、同様に石膏が施され、その上には石蓋が置かれていた。

なお、石膏張の床 (F2) と地下式石組遺構の層位的関係は、地下式石組遺構の崩壊土の上に、石膏張の床 (F2) が一部残存していたという事実によって、明らかとなる。

(v) 排水施設 (D3)

グリッド E-XI 区域より発見されたこの遺構は、長さ 130 cm、径 25～35 cm の土管 (Fig. 6-26) を、大きさ 100 cm×90 cm、深さ約 120 cm の石積み壁をもつ穴に連結する排水施設である (Fig. 4-c)。排水管を通った水は、この穴に流れつく構造になっている。排水管は、立石を並べた溝の中におかれ、立石は石膏で固定されている。そして、排水管と排水穴が連結する部分には、石蓋がかぶせられていた。

この排水施設は、排水管の傾斜と方向から、石膏張の床 (F2) との関連が考えられる。仮に傾斜角度を、まっすぐに延長すると、排水管の起点は、円形のものとして復原されるであろう石膏張の床 (F2) のほぼ中心に求めることができ (Fig. 4-c, 5-4)、石膏張りの床 (F2) は、水に関係する施設を含む遺構であったと考えられる。

(vi) Wall C

大小の礫群が約 3 m で地表面に馬蹄形状に広がったものである。これらは、上記(ii)と(iii)、(iv)などの遺構の崩壊礫と、その他の礫群からなる。しかし、これらの礫群は、建物の基礎あるいは石敷といった明確なプランを呈しておらず、この遺構の性格を把握するのは困難であった (Fig. 2-b)。

(vii) Wall B

この遺構は、A 区近傍では、残存幅 3～4 m、残存高 0.3～0.4 m を有し、大小の礫を練土で固定したものである。そして、この礫の集合群が、オウシーヤ地域内を南北の方向に一定幅で横断し、蛇行するユーフラテス川を結んでいる。ただ、この形状はあまり整ったものではない。

3. 遺 物

(1) 出土状況

表土から地下式石組遺構内までの出土遺物は多数であるが、後世の攪乱により元位置を留めているものは僅か

である。

地下式石組遺構内では、天井直下から最下の床面まで、いたるところから遺物が出土した。RM の石膏床 MF3, RS の石膏床 SF4 の下からも、散乱した状況で遺物が出土しているため、この遺構が一度のみならず、何度も攪乱を受けた事がこれらの状況から指摘できる。

攪乱を受けた地下式石組遺構内からは、ほぼ完形であるイシン・ラルサ期の3点の土器 (Fig. 6-7, 18, 19) と円筒印章 cylinder seal, 石製おもり weight の総てが出土している。またこれに加え、その他のビーズ bead 等の石製品、貝製品、金属器等もそのほとんどが石組遺構内と、その周囲に出土地点が限られるため、これらの遺物の多くは、地下式石組遺構に伴うものであろう。

第2期に、既に大礫等の堆積により、攪乱され難い状況にあったと思われる RW は、他の室と異なり、後の攪乱をおかたまぬがれている。この室より円筒印章、ビーズ類、貝製品等が他の室と比較にならない程、多量に出土している事は、この理由によるところが大きい。円筒印章のうち3点 (Fig. 9-1, 4, 5) は、RW の奥壁隅の床面直上から出土したイシン・ラルサ期の土器 (Fig. 6-17, 6-19) とともに採取したが、それ以外の円筒印章のほとんどは、RW' の床面として利用された RW の崩壊礫の中に混入していた。ビーズ類、貝製品等においても同様の出土状況を示す。こうした出土状況から推測すると、これらの遺物のほとんどは、第1期（創建期）に伴うものであり、RW' は RW 崩壊後に RW の内壁の一部を利用して掘り切り面の南西方向へぎりぎり一杯に付けたされた室である。

天井石が残っていて、中に侵入しやすい状態にあった RN, RE では、破壊が石膏床下にまで及び、この攪乱時期に混入したと考えられる土器等も出土している。また RE から出土した土器 (Fig. 7-5) の破片が、表土から石組遺構の床面まで散乱して検出されている。この事は、RE の天井が開いていたこととも関係し、後世に遺物混じりの土砂を、石組遺構内に詰めたとする可能性を示すものであろう。このように、ほとんどの遺物が、遺構の時期を決定するのに不十分な出土状況にあった事、また、これら出土遺構の時期が一樣でない事等は、何時期かの複雑な変遷をたどる遺構の年代を遺物だけで確定する事を困難にしている。

Fig. 8 のテラコッタ小像 terra-cotta figurine は、配石遺構周辺にその出土が目立つため、それらは、配石遺構、および F1a, F1b に伴う遺物と考える。また等身大のライオンテラコッタ像 (Fig. 12-4, 5) は、その破片のほとんどが階段遺構に伴う床面上に散乱している事からみて、階段遺構、F3 等の遺構に伴う遺物であることは疑いない。

Wall B, Wall C 内から出土する遺物は、いわば、礫と同じように、これらの遺構を形成する構築材料の一部として利用されている。このため Wall B, Wall C から出土している遺物は、これらの遺構以前の遺物と考えられる。

(2) 土 器

口縁部から底部まで復元できる出土土器の数は限られているが、壺型土器、碗型土器と共に器台型土器の出土が目立つ。そして、それらのほとんどはロクロ作りである。胎土は、比較的良質の粘土に砂、あるいは砂と^{すこ}粘土を混入させたものが多いが、水ごしされ、混入物のない良質粘土で作られた薄手の土器も少量ではあるが出土している。胎色は、淡紅色のものと、淡緑色のものが多く、化粧土が明瞭な例は少ない。

装飾のある土器は、竹管文を主体とした文様を有する土器や、隆起帯の上に指やヘラを押し付けたもの、波形の刻文をもつもの等がある。また動物文等を有する灰色刻文土器 (Fig. 6-19-22) も出土している。わずかではあるが、器台型土器等に赤の彩色が見られた。

RM の、第3期石膏床下から出土した壺型土器 Fig. 6-18 は、テル・アル・ディバイ Tellal-Dhibai のⅣ、Ⅴ層出土の土器⁶⁾、テル・アスマル Tell Asmar 出土の土器⁷⁾と類似しており、円筒形の胴部に、二重口縁、丸底を有する。年代的にはイシン・ラルサ期から古バビロニア期にかけてのものである。

RW 第1期の遺物である土器 Fig. 6-19 は、RS 第4期の石膏床 (SF4) 下から出土した土器 Fig. 6-20, 21, 22 と同型の土器である。そしてこれと同類の土器は、ニップール Nippur の出土例⁸⁾、テル・アスマルのラルサ期層からの例⁹⁾、このほか、スーサ Susa¹⁰⁾、テルロ Tello¹¹⁾、ヌジ Nuzi¹²⁾ ハルマル¹³⁾ 等の各遺跡から出土している。またハムリン Himurin 盆地のテル・ハッサン Hassan¹⁴⁾、テル・ヤルヒ Yelkhi¹⁵⁾、テル・ソルゴル Songor B¹⁶⁾、テル・スレイマ Sleima¹⁷⁾ 等からも、これらはイシン・ラルサ期の層から出土しており、広範囲にわたる分布が見られる。A区出土のこの型の土器のほとんどは、丸底を有し、その外側に、それをつつむように高台を付け、円筒状の外観をもつ。内外面共、暗灰褐色から暗灰茶褐色であり、表面は磨かれている。また、赤い彩文を施されているものもある。肩の部分に穿孔された4耳を有し、それと対応するように高台部下方にも孔が穿たれている。文様は、鮮明な刻線で描かれ、クシ歯状の道具による刺突文で刻線と刻線の間を埋めている所もある。その他の文様としては、竹管文、鳥等の動物文、三角文などの刻文が見られる。そしてさらに石膏をこれらの刻文に埋め込み、文様をより鮮やかに表現している例もある。

その中でもほぼ完形で出土した例 (Fig. 6-19) は、胴部が四つの画面に縦割りされており、2面は幾何学文様 (Fig. 12-1) を有し、スーサ出土の文様と¹⁸⁾ 類似する。また、1面はウシと考えられる四足獣、他の1面は神殿の入口とその上に三日月をのせた棒を描く。この三日月形は月の神の象徴であろう。またこれと同様のシンボルは Fig. 6-12 の四足獣の背中の上にも描かれている。なお壺型土器にも同質の濃灰褐色土器が出土している。これは、口縁部上面に竹管文が施されており、テル・アスマル出土の例¹⁹⁾ と酷似している。

これらの灰色土器は、広範囲に分布する遺跡から出土するのにもかかわらず、手法、器形、文様などが極めて類似している。これは、時期及び製造地が共通していることを示唆している。²⁰⁾

竹管文等の刻文を口縁の上、胴部、隆起帯の上に施した土器 (Fig. 7-12~16 は、ハディーサ地域内のディニア遺跡 (仏隊1982年調査) の古バビロニア期の神殿から出土した例²¹⁾ と、型式を同じくする。またヌジからも同様の文様を有する土器が出土している²²⁾。

胴部にふくらみを有する器台型土器 (Fig. 7-5, 7) は、同地域のテル・アブ・ソール²³⁾ ほか、ヌジにも類似例がある²⁴⁾。Fig. 7-5 は竹管文が胴部のふくらみ部等に施されている。Fig. 7-6 は赤彩が外面全体に塗られている。この他、A区では器台型土器の出土が多く、素文である Fig. 7-8, 9 から、波形の刻線文を施したもの、四角形、三角形、円形等の透かしを有するものが多数出土している。

このような刻文、彩文を有する土器以外に、壺型土器、壺型土器、ゴブレット等の素文土器が多数出土している。テル・デール Deir 等から出土した土器と類似する器形をもつ一群 Fig. 6-1, 2, 3 は、紀元前1750年前後の土器とされている。乳房形及び尖底を有する土器 Fig. 6-4, 5, 6 の類は数的には多くなく、紀元前2千年紀中頃から後半にかけてのものであろう。糸切り底を有し、内面調整を施す一群 Fig. 6-7, 8 は小型の壺であろう²⁵⁾。同様に糸切り底を有するが、内面調整が認められない一群の土器 Fig. 6-9, 10, 11 は、ゴブレット、壺等の背の高い器形の土器になるのではないかと考えられる。A区から出土する土器底部のほとんどは、糸切り痕のはっきりした平底を有する土器と、高台を有するもの (Fig. 6-2, 3, 12~14, 23) に二分できる。

RE 内出土のコップ型土器 Fig. 6-12 は、イシン・ラルサ期に多くみられる器形である。この土器は、極めて

良質な粘土で作られた薄手の土器であり、テル・デール²⁶⁾等で類似する土器が出土している。

壺型土器は (Fig. 6-23~25 Fig. 7-10, 11) 多く出土しているが、それらの多くは、紀元前2千年紀前半ぐらいと推定される。これらのうち2点 (Fig. 7-10, 11) は、同地域のテル・アブ・ソールに²⁷⁾ 類例が出土している。もっともこのように装飾が施された壺は、A区には少ない。

なお出土した土器全体をみると、年代には幅があり、紀元前2千年紀初頭から後期アッシリア時代ぐらいのものまでを含んでいる。しかし地下式石組遺構に伴うと考えられる土器は、いずれも、イシン・ラルサ期から古巴ビロニア期にかけてのものである。

(3) テラコッタ (Fig. 8)

A区から出土したテラコッタ像には、ライオンを表したもの (Fig. 8-1, 5), 女性を表したもの (Fig. 8-3, 4, 6, 7) のほか、いわゆるエンキドゥの表現をしたもの (Fig. 8-2), 戦車, 家具の模型 (Fig. 8-8, 10~13) がある。人物像, 動物像のほとんどは、型による成形で、飾り板が付いている。

大きな断片の一部分 Fig. 8-5 は、土器等、他の種類の遺物に付けられた装飾の可能性もある。

Fig. 8 に掲載したテラコッタ類は、ほとんど配石遺構周辺から出土した。そしてイシン、ウル、ニップール、アッシュール、デールなど多くの同時期と考えられる遺跡から、同類のテラコッタが出土している。従って、これらは、イシン・ラルサ期から古巴ビロニア期の遺物であると考えられる。

上記のテラコッタ類の他に、等身大ライオンのテラコッタ像が、少なくとも4体以上、F3の床面およびその周辺の石堀の崩壊礫層中から出土している。Fig. 12-4, 5 に示した等身大ライオン²⁸⁾ は、台座に座っており、タテ髪の部分が黒彩、顔と皮膚にあたる部分には赤彩が施されている。これらのライオン像の類例は、マリの王宮内²⁹⁾、テル・ハルマルの神殿入口³⁰⁾、スーサ³¹⁾、ヌジ³²⁾等の遺跡からも出土していて、特にテル・ハルマル出土のライオン像は、姿勢や、形状、表現の点で、より近似性を見せる。またスーサ出土のライオン像には彩色があつて興味深い。同じハディーサ地域内でも、マウンド・オウシア³³⁾、ディニア等³⁴⁾の遺跡から類例が出土している。

年代的にはディニアのテラコッタ製ライオン像は、古巴ビロニア期とされ、テル・ハルマル出土例とはほぼ同時代である。マリの、ジムリ・リム Zimri-Lim 王の時代にダガン神殿の入口にライオン像を配したという記録がある³⁵⁾。ダガン神殿から出土したライオン像で知られているものは、青銅製のものであり³⁶⁾、テラコッタ製のライオン像は王宮から出土している為³⁷⁾、この記述をテラコッタ製のライオン像にあてはめるのは難しいかもしれないが、いずれにせよ、ほぼ同時期において広範囲にわたり、ライオン像が神殿もしくは王宮内に配されていた事は甚だ興味深い。

またこれらの等身大のライオン像に加え、中型および小型 (Fig. 12-7) のライオン像が多数置かれていた事が、その破片から推測できる。これらにもまた赤、黒の彩色が施されていた。

この他、人物像と考えられる断片、性格の不明なテラコッタ類が多数出土している。

(4) 円筒印章

ヘマタイト製、アラバスター製、土製、チョーク製等、15点の円筒印章が出土している。礼拝場面、贈呈場面等、儀式的なもの (Fig. 9-2, 4~9) から、神話の場面 (Fig. 9-3, 9, 10), 音楽演奏場面 (Fig. 9-1) を描いたもの等がある。文字資料をもつ印章も一点だけあり、^dDagan-illatu³⁸⁾と記されている。スキを右手に握った神が、文字資料からダガン神であるとすれば、ダガン神が農耕神であるという示唆がここで得られる。また、5層の神殿を

描く印章もあり (Fig. 9-5), その入口前にはライオンのような動物が口を開けている。

(5) その他の遺物

地下式石組遺構内を中心として、前述の出土遺物の他、ヘマタイト製のおもり (Fig. 13-5)、ビーズ (Fig. 9-11 ~ 26, Fig. 13-6)、金属器 (Fig. 9-27 ~ 35, Fig. 13-4)、石製品 (Fig. 13-2)、象牙製品 (Fig. 13-8)、ファイアンス製品 (Fig. 13-9) 等、数多くの遺物が出土している。

ビーズは、メノウ、アラバスター、ファイアンス、水晶、ラピスラズリー、骨、貝等の材質で作られている。頭は欠落しているが、かぶり物を着た人物像を表すメノウ製 (Fig. 9-18) もあり、その背中には横方向の穴が穿たれている。

ヘマタイト製のおもり (Fig. 13-5) は、ほとんどが、たる型であるが、カエル型も1点出土している。これらと同種の遺物は、イシン³⁹⁾、マリ⁴⁰⁾ ほか多数の遺跡から出土しており、イシン・ラルサ期から古バビロニア期にかけての製品と考えられる。

金属製品は、装身具、針のほか多数出土している (Fig. 9-27 ~ 35, Fig. 13-4)。

石製品としては、尻尾のある人物の下半身を浮彫りにした容器片 (Fig. 13-2 左) が、また象牙製品としては (Fig. 13-8) の丸彫りの人頭、ファイアンス製品では、フンババ面 (Fig. 13-9)、ライオン型ビーズ等興味深い資料が出土している。

貝製品の出土はほとんど手を加えていない貝殻 (Fig. 13-3) も含め、おびただしく、特に巻貝を切断加工した輪 (Fig. 13-1) が数千点にもおよぶ。そしてこれらの輪は、指輪としてだけでなく、その使用痕から、衣服などにぬい付けられていたのではないかと想像できるものもある。

その他獣骨片、ヌジ⁴¹⁾ やディニア⁴²⁾ 等でもみられるダチョウの卵殻も多数見られたが、人骨の出土はなかった。

4. ま と め

オウシーヤには、初期王朝Ⅲ期 (1980年、イラク隊調査の地下式石組遺構) からイスラム時代までの遺構が散在しているが、そのほとんどが埋葬施設である。中でも、紀元前2千年紀に相当する墓が占める割合は大きい。しかし、これらの墓に関係する顕著な居住区域は、オウシーヤあるいはこの近隣区域において、まだ発見されていない。

A区においては、紀元前2千年紀初期から、後期アッシリア時代にかけての遺物を確認した。しかし、確実に遺構と共伴する遺物が少なかったため、各遺構の時期を明確に限定することはできなかった。そこで、遺構と遺物の関係が明確なものを基準にして、確認された遺構の前後関係から、各遺構の時期を判定した。

その結果、(i) 地下式石組遺構 → (ii) 配石遺構と (iii) 石膏張の床 (Fla, Flb) → (iv) 石積みによる段階と石膏張の床 (F2, F3), Pit (P2a, P2b, P3) と (v) 排水施設, (vi) Wall C → (vii) Wall B という各遺構間の前後関係の中で、(i) ~ (v) までの遺構はイシン、ラルサ期から古バビロニア期の間におくことができた。(vi) は (i) ~ (v) の崩壊跡である。(vii) は、表層上部の遺構であること、及び中期アッシリア以後の遺物がこの地区に散乱していたことなどから、中期アッシリアかあるいはそれより後の時期であろうと推定した。

(i) 地下式石組遺構の性格は、その構造、出土遺物等から、埋葬施設と推測されるが、人骨の出土はなく、これを証拠づけるまでには至らなかった。しかし、もし埋葬施設だとした場合、数回にわたる破壊を受けながら

も、その時代においてはかなり高価と考えられる製品を保有しており、地位のある人物の墓であったであろう。

ただ構築時代の時点で、二つのグループ、つまり入口が側面にある南西部分と、入口が天井部にある北東部分では、それらが一体となった構造ではあるにしても異なった機能を持ち、異なった利用法がとられていた事が考えられる。

またB区の近くにあるイラク隊が発掘した墓の構造、およびその方位が、A区の地下式石組遺構に極めて類似する点は興味深い。このイラク隊調査の石組遺構は、初期王朝Ⅲ期に比定されているが、A区の石組遺構は、その伴出遺物から考えると、その時期にまでさかのぼらせることは難しい。また(iv)の階段を伴うライオン像を安置した石膏床 F3 と同時期である F2 を破壊してまで、既に放棄されたはずの(i)地下式石組遺構が破壊されたという事は、この石組遺構が神聖な性格を有していたことを示唆している。

神殿の入口を図案化した文様をもつ完形土器 (Fig. 6-19) 及び円筒印章に描かれた場面 (Fig. 9-5) は、この遺構が神聖な建物であった可能性を示している。

(ii) 配石遺構及び(iii)石膏張の床 (F1a, F1b) の性格は、(ii)に囲まれた場所が広場、そして(iii)の石膏張床は居住空間の痕跡とも考えられる。そして(ii)の配石遺構については、平坦な一枚石、または椅子状、箱状に組まれている等多種の形状を示し、一様にその性格をとらえる事はできないが、そのいくつかは、犠牲台的な要素のあるもの、彫像を立てた台座等と考えられないだろうか。多くのテラコッタがこの付近から出土した状況から、これら配石の石組みは、テラコッタをのせた台であったかもしれない。

(iv) 石で作られた4段の階段と石膏張の床 F2, F3, ピット P1, P2, P3 (v) 排水施設 D3 等の新しい施設が廃絶された地下式石組遺構の上に営まれた。そしてこれらの遺構には等身大ライオン像が伴う。この事は、地下式石組遺構の廃絶後も、このA区が神聖な場所であったことを意味する。

(vi) Wall C は(i)~(v)までの崩壊礫とその他礫群の堆積である。

(vii) Wall B はオウシーヤ地区の地形の中で高い所をつないで築かれているため(i)から(v)の遺構が廃絶した後、何らかの意図で、オウシーヤ地域を囲む境界壁の役目を果たしたと考えられる。

オウシーヤは歴史上地理的位置において、マリと南のイシン・ラルサ、バビロンなどのバビロニアをつなぐ主要幹線路上にある。そしてまたアッシリア地域とマリを結ぶ重要な軍道筋にもあたる。A区の遺物はすべて、これらの遺跡と結びつけうる資料である。

何回もの異常なまでの破壊は、地下式石組遺構に対してだけではなく、等身大ライオン像を伴う上部施設に対しても行なわれた。この事は、その当時オウシーヤ地区が政治的、民族的に極めて錯綜した関係の中におかれていた事を暗示してはいないだろうか。

(藤井秀夫、松本 健、小口裕通、八木和美)

注

- 1) Fujii & Okada, 国士舘大学イラク考古学調査団テル・アブ・ソール班, 1982-1983参照。
- 2) Fujii & Okada, 国士舘大学イラク考古学調査団テル・アブ・ソール班, 1982-1983参照。
- 3) Fig. 1 は、イラク古物遺産庁の遺跡分布図(縮尺10万分の1)に基づいて作成されたラーフィダーンⅢ・Ⅳ掲載の図である。
- 4) イラク隊はこのラインに沿い約10ヶ所の試掘で、残存壁の幅 5m, 高さ 2~3m の石壁遺構を検出している。この遺構は中小角礫をつみ上げ、練り土で固結されていた。なお、マウンド・オウシーヤについては, Iraq Vol. 43 part 2. 1981 p. 198, 及び, Iraq Vol. 45 part 2. 1983 pp. 222~223 を参照。
- 5) British School of Archaeology in Iraq, 1981: p. 198 による。

- 6) Al-Gailani, 1965, 及び, Mastafa, 1949 を参照。
- 7) Delougaz, 1952: Pl. 145, A 758, 540.
- 8) McCowen, 1967: Pls. 92~125.
- 9) Delougaz, 1952: Pls. 123~125.
- 10) De Mecquenem, 1943: Figs. 46, 82.
- 11) Parrot, 1948.
- 12) Starr, 1937: Pl. 56 I~S.
- 13) モースル博物館所蔵, オウシーアの出土のものと同様, 神殿の入口, 四足獣等の刻文が見られる。
- 14) Firolina, 1984.
- 15) Bergamini, 1984.
- 16) Fujii & Matsumoto, 1981: Fig. 50-12.
- 17) テル・スレイマンの調査員, Sd. Salah より情報を得た。
- 18) De Mecquenem, 1943: Fig. 46 の右。
- 19) Delougaz, 1952: Pl. 123-a, b.
- 20) Delougaz, 1952: p. 120 でも示唆されている。
- 21) Joannès ほか, 1983: Fig. 4-5, 6.
- 22) Starr, 1937: Pl. 45-D.
- 23) 国士館大学イラク考古学調査団テル・アブ・ソール班, 1982-1983: 図。
- 24) Starr, 1937: Pl. 114-D および Pl. 115-C, K.
- 25) ディニア遺跡から同タイプの土器が出土しているとの情報を, フランス隊から聞いている。
- 26) De Meyer ほか, 1978: Pl. 20-3.
- 27) 国士館大学イラク考古学調査団テル・アブ・ソール班, 1982-1983: 図。
- 28) Fig. 12-4, 5 は, 1 体以上の断片を使用して復元したものである。
- 29) Parrot, 1959: Fig. 49.
- 30) Baqir, 1946 & 1959 参照。
- 31) De Mequenem 1943: Fig. 45.
- 32) Starr, 1937: Pl. 109.
- 33) British School of Archaeology in Iraq, 1983: pp. 222~223 を参照。
- 34) Joannès ほか, 1983: Pl. I-2.
- 35) 中田一郎, 1975, 「マリ文書に現れる神ダガンについて」『ユダヤ・イスラエル研究』第7号によると, 参考文献として, Parrot, André, 1950: "Studia Mariana", Lelden, p. 58 そして, Georges Dossin, 1940: "Inscriptions de Fondation Provenant de Mair" pp. 167ff., Syria Tome XXI がある。
- 36) Amiet, 1977: Fig. 447.
- 37) Parrot, 1959: Fig. 49.
- 38) マリでダガン神を用いた人名は多数見られるが, これと同様の例は全くなく, 他神名に illatu を結合した例がシューメルで数点ある。^dDagan-illatu については, 吉川守教授から助言を得た。
- 39) Hrouda, 1981: Taf. 30.
- 40) Margueron, 1982: Fig. 6.
- 41) Starr, 1939: p. 488.
- 42) 完形のものが出土している事を, ディニア遺跡のフランス調査隊から聞いている。

参 考 文 献

- Andrae, Walter, 1922, *Die Archaischen Ishtar-Tempel in Assur* (WVDOG 39), W-Germany.
- Amiet, Pierre, 1977, *Art of the Aneient Near East*, New York.
- Arnaud, Daniel; Calvet, Yves; Huot, Jean-Louis, 1979, "Ilšu-Ibnišu, Orfèvre de L'E. Babbar de Larsa," *Syria* Tome L56, Paris.
- Baqir, Taha, 1946, "Tell Harmal a preliminary Report" *Sumer* Vol. 2, Baghdad.
- 1959, *Tell Harmal*, Baghdad.
- Bergamini, Giovanni, 1984, "The Excavations in Tell Yelkhi" *Sumer* Vol. 40 No. 1-2, Baghdad.
- British School of Archaeology in Iraq, 1981, "Excavations in Iraq, 1979~1980" *Iraq*, Vol. 43 Part 2, London.
- 1983, "Excavations in Iraq 1981~1982" *Iraq* Vol. 45 Part 2, London.
- Delougaz, Pinhas, 1952, "Pottery from the Diyala Region" (*OIP*. 63), Chicago.

- Fiorina, Paolo, 1984, "Excavation at Tell Hassan. Preliminary Report" *Sumer* Vol. 40 No. 1~2.
- Fujii, Hideo and Matsumoto, Ken, 1981, "Preliminary Report of Excavations at Gubba and Songor" *al-Rāfidān* Vol. 2.
- Fujii, Hideo and Okada, Yasuyoshi, 1986, "Preliminary Report of Excavations at Tell Abu-Thor 1981" *Sumer* (in press) Baghdad.
- Al-Gailani, Lamia, 1965, "Tell edh-Dhiba'i" *Sumer* Vol. 21, Baghdad.
- Gibson, McGuire, 1975, *Excavations at Nippur: Eleventh Season* (OIC No. 22), Chicago and London.
- 他, 1978 *Excavations at Nippur Twelfth Season* (OIC No. 23), Chicago and London.
- Howard-Carter, Theresa, 1983, "An Interpretation of the Sculptural Decoration of the Second Millennium Temple at Tell Al-Rimah", *Iraq* Vol. 45, London.
- von Hrouda, Barthel, 1981, *Isin-Išān Bahriyāt II*, München.
- Joannès, Francis; Kepinski, Christine; Lecomte, Olivier, 1983, "Présence Babylonienne dans le pays de Suhu au XVII^e Siècle AV. J.-C.: L'Exemple de Khirbet Ed Diniye (Irak)", *Revue d'Assyriologie et d'Archéologie Orientale* Vol. 77 No. 2, Paris.
- 国士館大学イラク考古学調査団テル・アブ・ソール班, 1982-1983, 「テル・アブ・ソール, 1981, 発掘調査概報」『ラーフィダーン』Vol. 3-4, 国士館大学イラク古代文化研究所, 東京
- Margueron, Jean, 1982, "Mari Report Préliminaire sur la Campagne de 1979" *Mari Annales de Recherches Interdisciplinaires* 1, Paris.
- McCown, Donald E, 1967, *Nippur 1* (OIP-78), Chicago.
- De Mecquenem, R., 1943, "Archéologie Susienne" *Mémoires de la Mission Archéologique en Iran* Tome 29, Paris.
- De Meyer, Léon, 他, 1971, *Tell ed Dēr I*, Leuven
- Gasch, Hermann et paepe, Roland, 1978, *Tell ed Dēr II*, Leuven.
- Mustafa, M. A., 1949, "Soundings at Tell Al-Dhiba'i" *Sumer* Vol. 5, No. 2, Baghdad.
- Parrot, André, 1948, *Tello*, Vingh Campagnes de Fouilles 1877~1933.
- 1959, *Le Palais*, *Mission Archéologique de Mari*, Vol. II, Paris.
- Starr, Richard, F. S., 1937 Vol. 2, 1937 Vol. 2, 1939 Vol. 1, *Nuzi: Report on the Excavations at Yorgan Tepe near Kirkuk; 1927~1931*, Cambridge.
- Woolley, Leonard; Mallowan, Max, 1976, *The Old Babylonian Period* ('Ur Excavations Vol. VII), London.

挿 図 一 覧

Fig. 1. Map of the Haditha region showing the Archaeological sites.

Fig. 2. Area A in 'Usiyeh.

- a. Contour Map.
- b. Excavated area.

Fig. 3. Plans of Area A in 'Usiyeh.

Fig. 4. Plans of the structures of Area A in 'Usiyeh.

- a. Original plan of the stone structure (lower level).
- b. Reused plan of the stone structure (upper level).
- c. Plan of the structure (upper level).

Fig. 5. Sections of the stone structure of Area A in 'Usiyeh.

Fig. 6. A selection of the pottery from Area A in 'Usiyeh.

Fig. 7. A selection of the pottery from Area A in 'Usiyeh.

Fig. 8. Terra-cotta figurines from Area A in 'Usiyeh.

Fig. 9. Cylinder seals, beads and bronze objects from Area A in 'Usiyeh.

Fig. 10. Structures of Area A in 'Usiyeh.

1. A part of stone wall C looking from the east.
2. A part of stone wall B looking from the east.
3. Dug pit of stone structure looking from the south.
4. Stone structure looking from the north-east.
5. Stone structure looking from the north-west.
6. Original plan of stone structure looking from the south-west.
7. General view of Area A looking from the east.
8. Reused plan (the first stage) of stone structure looking from the south-west.

Fig. 11. Structures of Area A in 'Usiyeh.

1. Reused plan (the last stage) of stone structure looking from the south-west.
2. Room RS of stone structure from the north-east.
3. Stone structure (lower level) and the other structures (Upper level) looking from the east.

4. Paved stones looking from the south.
5. Drain looking from the south-west.
6. Entrance of the RW looking from the inside.
7. Gypsum floor remained a corner of the room RN in Stone Structure.

Fig. 12. Pottery and terra-cotta figurines from Area A in 'Usiyeh.

1. Incised and white-filled grey ware.
2. Incised sherds selection.
3. Potstand sherds selection.
4. Terra-cotta lion (life size).
5. Terra-cotta lion (life size) looking from the front.
6. Female terra-cotta ware.
7. Small terra-cotta lion.
8. Parts (noses) of animal terra-cotta figurines.

Fig. 13. Other objects from Area A in 'Usiyeh.

1. Shell beads.
2. Parts of stone relief.
3. Various kinds of shell beads.
4. Bronze rings.
5. Weights.
6. Various kinds of stone beads.
7. Cylinder seals.
8. Ivory mask.
9. Frit mask.

A selection of the pottery from Area A in 'Usiyeh (Fig. 6).

1. Shoulder cup from the whitish soil of FXII.
2. Shoulder cup from the deposit of the stone structure.
3. Shoulder cup from the deposit of RS in the stone structure.
4. Nipple base from the surface soil of XII.
5. Nipple base from the surface soil of XI.
6. Nipple base from the deposit of in the stone structure.
7. Small bowl from the trench 1.
8. Small bowl from the surface soil of EXI.
9. Flat base from the surface soil of EXI.
10. Flat base from the surface soil of FXII.
11. Flat base of jar, from trench 1.
12. Beaker from the deposit of RE in the stone structure.
13. Ring base from trench 1.
14. Ring base from the surface soil of DXI.
15. Flat base from trench 1.
16. Flat base from the surface soil of FXII.
17. Small jar on the floor of RW in the stone structure.
18. Bottle on the floor of RM in the stone structure.
19. Incised gray ware on the floor of RW in the stone structure.
20. Lower part of the incised gray ware below the gypsum floor (SF4) of RS in the stone structure.
21. Sherd of the incised gray ware below the gypsum floor (SF4) of RS in the stone structure.
22. Sherd of the incised gray ware, from the whitish soil of EXIII.
23. Bowl from the deposit in the stone structure.
24. Bowl from the deposit of RS in the stone structure.
25. Bowl from the surface soil of DXII.
26. Drain pipe in the drainage (D3) of EXI.

A selection of the pottery from Area A in 'Usiyeh (Fig. 7).

1. Wide-mouthed jar from the deposit of RS in the stone structure.
2. Jar rim from the surface of FXII.
3. Incised jar rim from the deposit of RN in the stone structure.
4. Rim from the whitish soil of EXII.
5. Potstand jointed sherds from the surface soil, the whitish soil, and the deposit of RE in the stone structure.
6. Potstand jointed sherds from the whitish soil of DXI, and whitish soil of EXII.
7. Potstand jointed sherds from the surface soil, the whitish soil, and the deposit of RE in the stone structure.
8. Potstand from the surface soil of DXI.
9. Potstand from the surface soil of trench 3.

- 10, Incised bowl from the surface soil of GXVII.
- 11, Incised bowl from the deposit of RE in the stone structure.
- 12, Incised bowl from the deposit of RE in the stone structure.
- 13, Incised bowl from the deposit of RE in the stone structure.
- 14, Incised jar rim from the surface soil of FXIII.
- 15, Incised jar rim from the surface soil of FXII.
- 16, Incised jar rim from the deposit of RS in the stone structure.

Terra-cotta figurines from Area A in 'Usiyeh (Fig. 8).

- 1, Lion from The whitish soil of DXII.
- 2, The bull-man holding the staff from the surface soil of teach 1.
- 3, Nude female from the deposit of RW in the stone structure.
- 4, Nude female figure holding her breast from surface soil of EXII.
- 5, Quadroped, a part of pottery? from the surface soil of trench 1.
- 6, Nude female, from the whitish soil of CXI.
- 7, Nude female with anklet from the deposit of D3.
- 8, Model of bed from the surface soil of the GXV.
- 9, A part of the model chariot? from the whitish soil of the FXII.
- 10, A part of the model chariot from the surface soil of EXI.
- 11, Front of the model chariot from the surface soil of EXI.
- 12, Front of the model chariot from the surface soil of DXII.
- 13, Wheel of the model chariot from the deposit of the EXII.

Cylinder seals, beads and bronze objects from Area A in 'Usiyeh (Fig. 9).

- 1, Cylinder seal (impression), clay, music play scene, from the deposit of RW in the stone structure.
- 2, Cylinder seal (impression), clay, probably worship or presentation scene, from the deposit of RW in the stone structure.
- 3, Cylinder seal (impression), chalk, epic scene, from the deposit of RW-RS in the stone structure.
- 4, Cylinder seal (impression), Alabaster, probably presentation scene, from the deposit of RW in the stone structure.
- 5, Cylinder seal (impression), Alabaster, worship scene, from the deposit of RW in the stone structure.
- 6, Cylinder seal (impression), Hematite?, inscribed ^dDegan-illatu, worship scene, from the deposit of RW in the stone structure.
- 7, Cylinder seal (impression), Hematite, presentation scene, from the deposit of RE in the stone structure.
- 8, Cylinder seal (impression), Hematite, worship or presentation scene, from the deposit of RW in the stone structure.
- 9, Cylinder seal (impression), Hematite, worship or presentation scene, from the deposit of RW in the stone structure.
- 10, Cylinder seal (impression), stone, two hero attack animal (bull?), from the deposit of RS in the stone structure.
- 11, Bead, black stone, from the deposit of RS-RW in the stone structure.
- 12, Bead, agate, from the deposit of RW in the stone structure.
- 13, Bead, agate, from the deposit of RN in the stone structure.
- 14, Bead, shell?, from the deposit of RN in the stone structure.
- 15, Bead, faience, from the deposit of RW in the stone structure.
- 16, Bead, reddish stone, from the deposit of RW in the stone structure.
- 17, Bead, agate, from the deposit of RS in the stone structure.
- 18, Bead, agate, from the surface soil of GXVI.
- 19, Bead, faience, from the deposit of RW in the stone structure.
- 20, Bead, faience, from the deposit in the stone structure.
- 21, Bead, faience, from the deposit of RE in the stone structure.
- 22, Bead, alabaster, from the deposit of RW in the stone structure.
- 23, Bead, stone, from the deposit of RW in the stone structure.
- 24, Bead, agate, from the deposit of RW in the stone structure.
- 25, Bead, brownish stone, from the deposit of RW in the stone structure.
- 26, Bead, dark greenish stone, the deposit of RS in the stone structure.
- 27, Anklet, bronze, from the deposit of RW in the stone structure.
- 28, Knife, bronze, from the deposit of RE in the stone structure.
- 29, Pin, bronze, from the deposit of RW in the stone structure.
- 30, Ring, bronze, from the deposit of the stone structure.
- 31, Ring, bronze, from the deposit of the stone structure.
- 32, Needle, bronze, from the deposit of the stone structure.
- 33, Pin bronze, from the deposit of EXI, XII.
- 34, Dress or tagglepin with fluted heads, bronze, from the deposit of RW in the stone structure.
- 35, Nail or Wedge, bronze, from surface soil of CXIII.

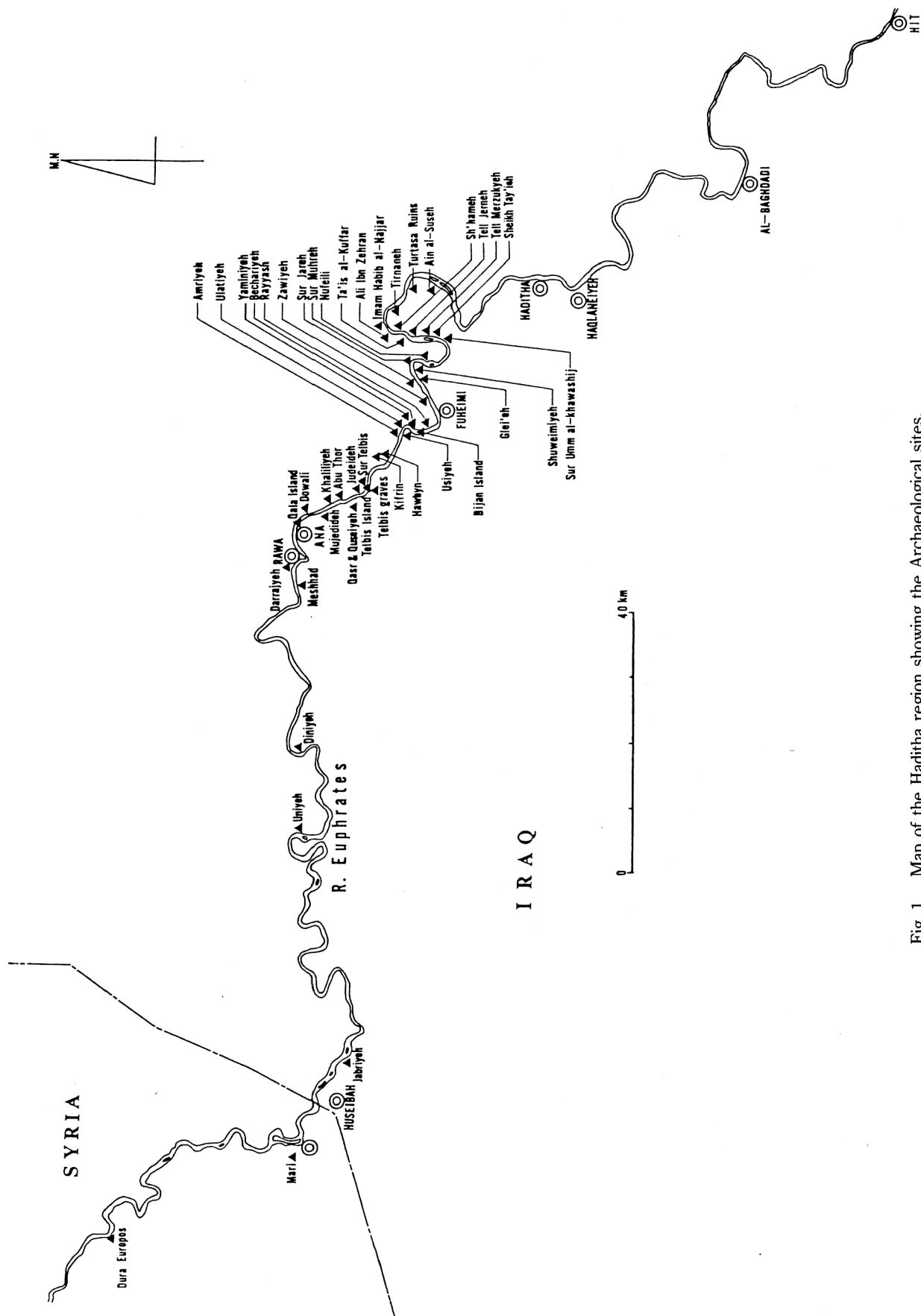
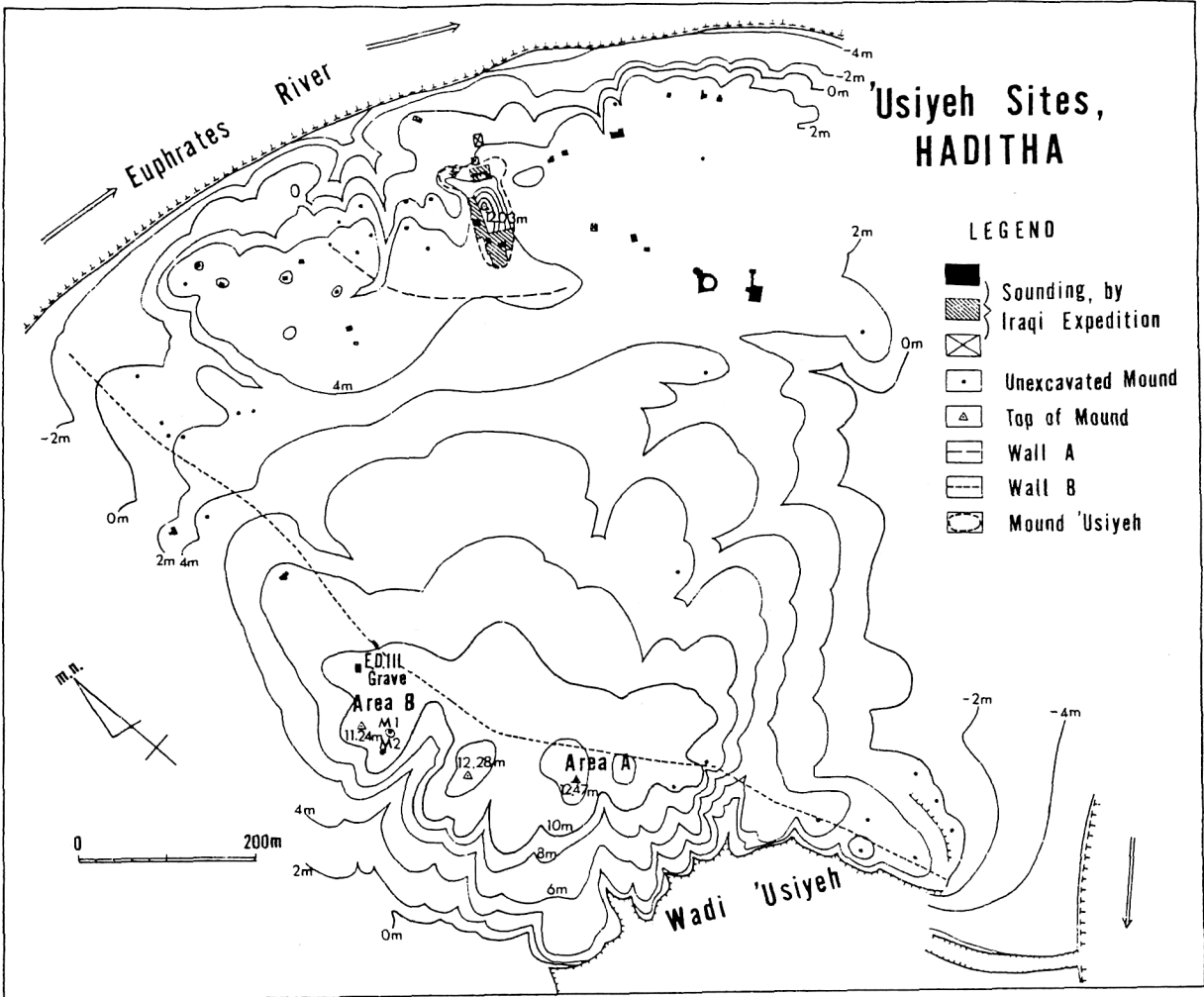
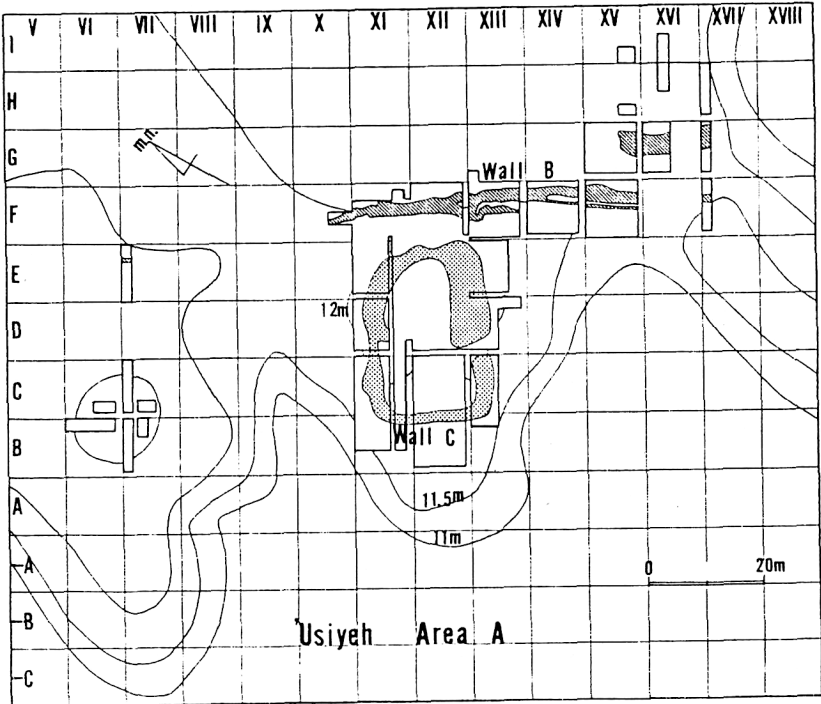


Fig. 1. Map of the Haditha region showing the Archaeological sites.



a. Contour map.



b. Excavated area.

Fig. 2. Area A in 'Usiyeh.

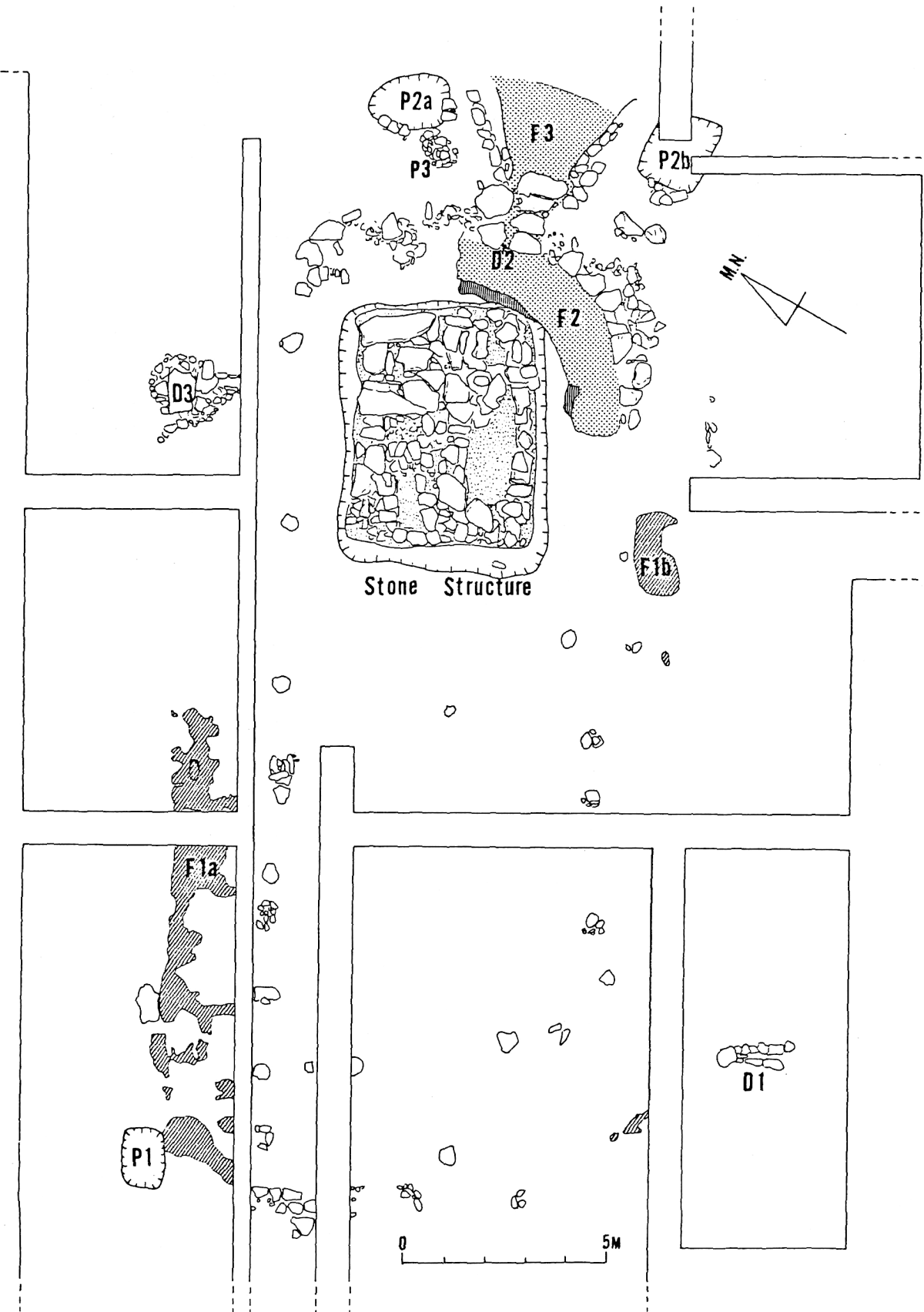


Fig. 3. Plans of Area A in 'Usiyeh.

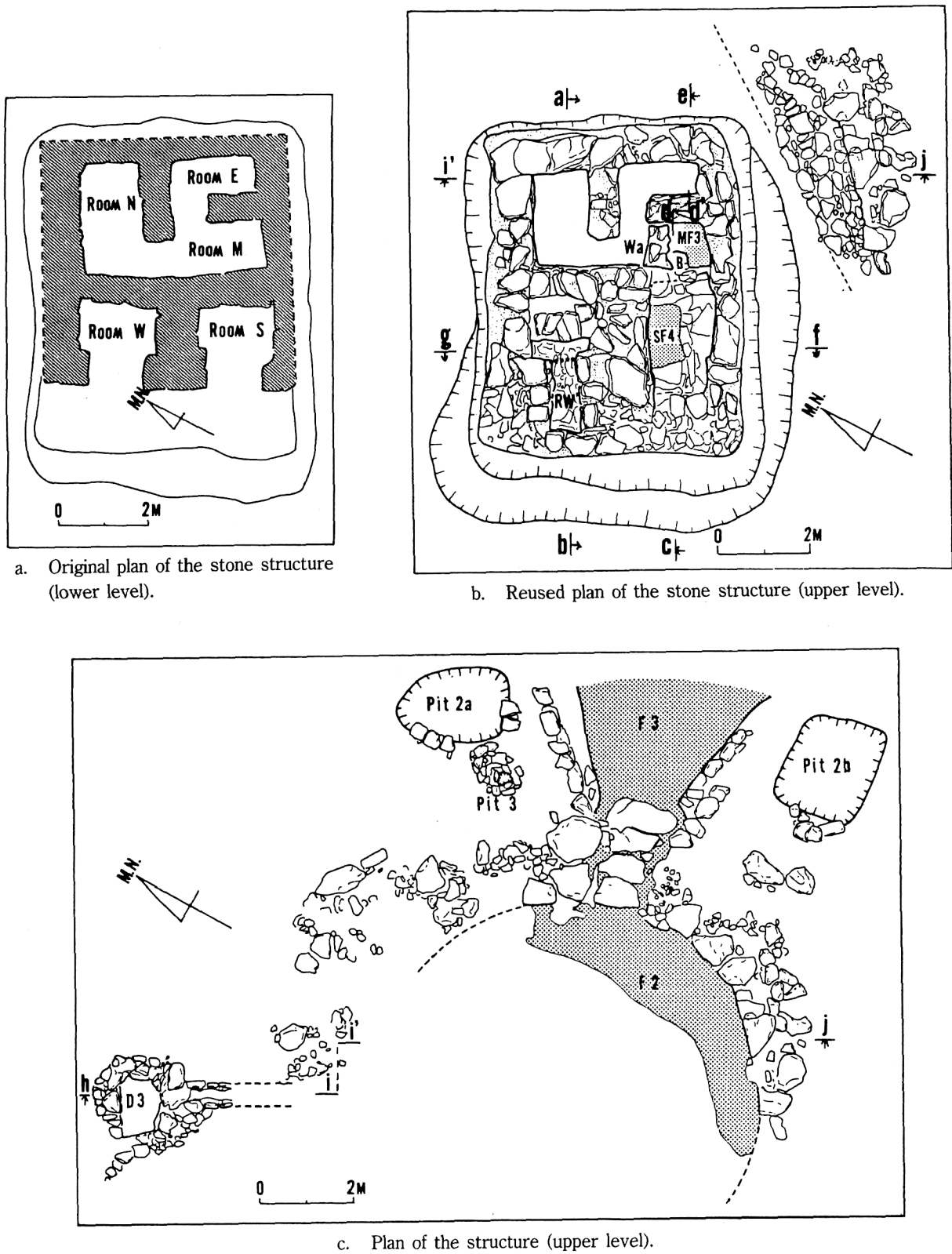


Fig. 4. Plans of the structures of Area A in 'Usiyeh.

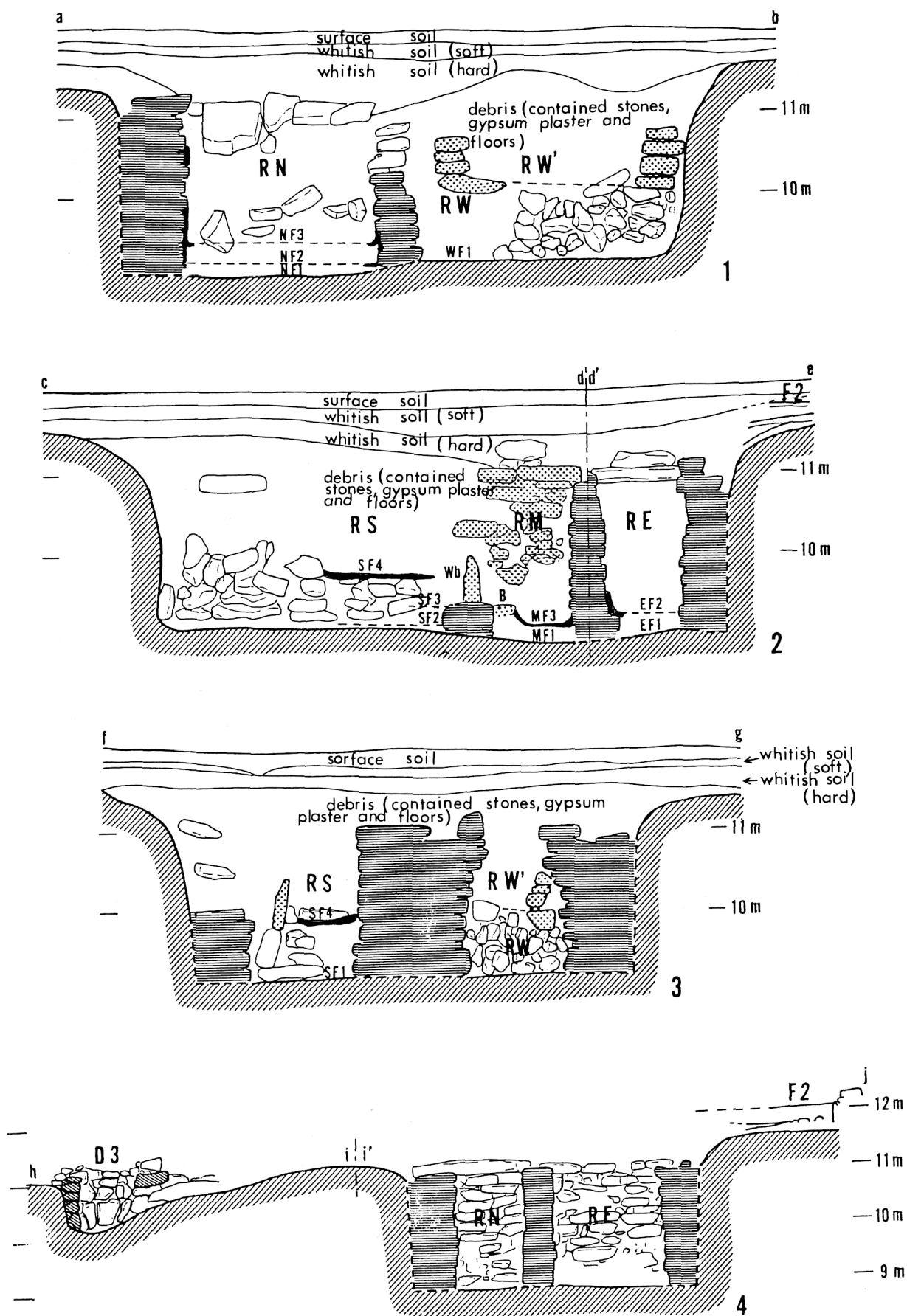


Fig. 5. Sections of the stone structure of Area A in 'Usiyeh.

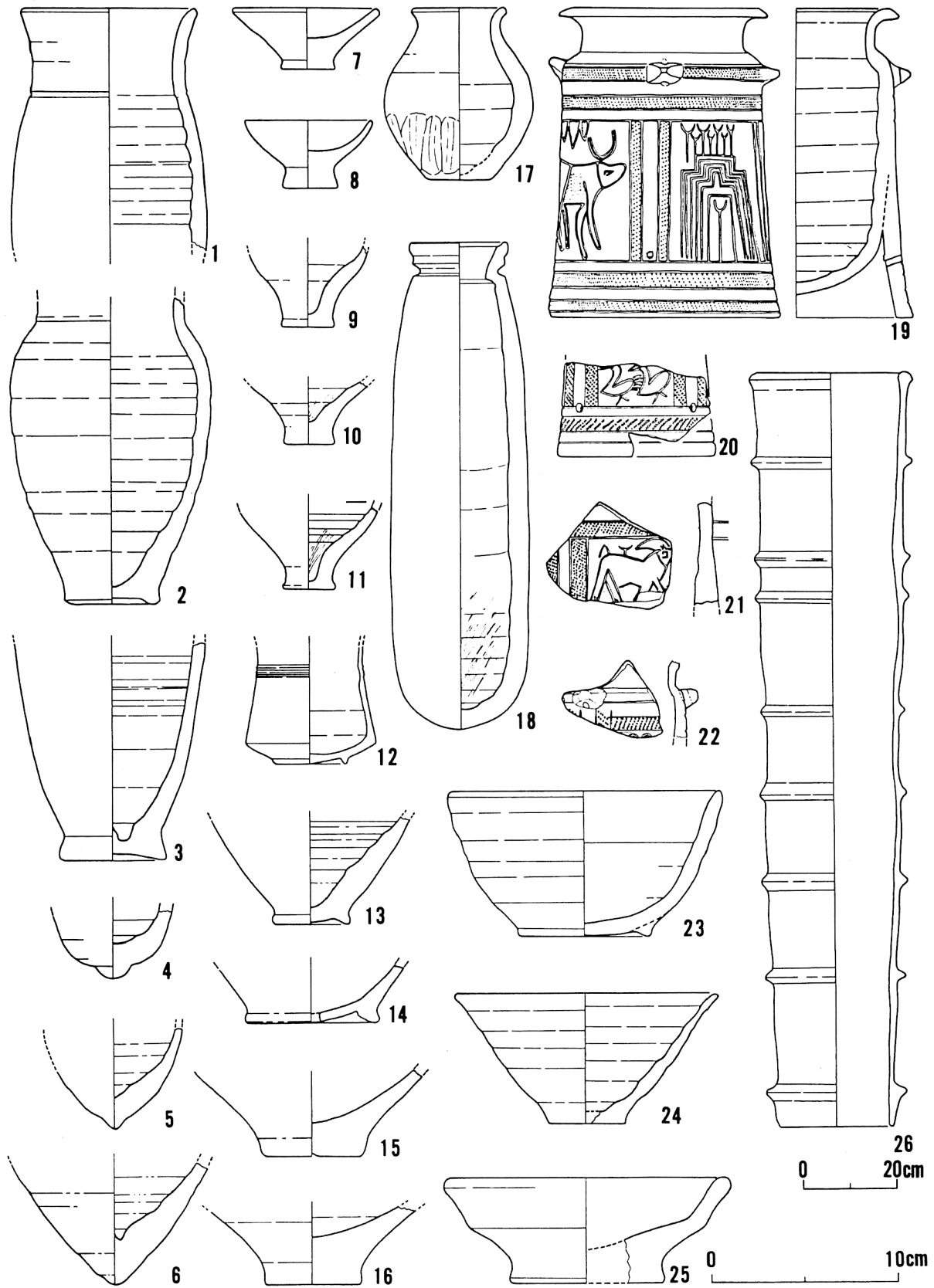


Fig. 6. A selection of the pottery from Area A in 'Usiyeh.

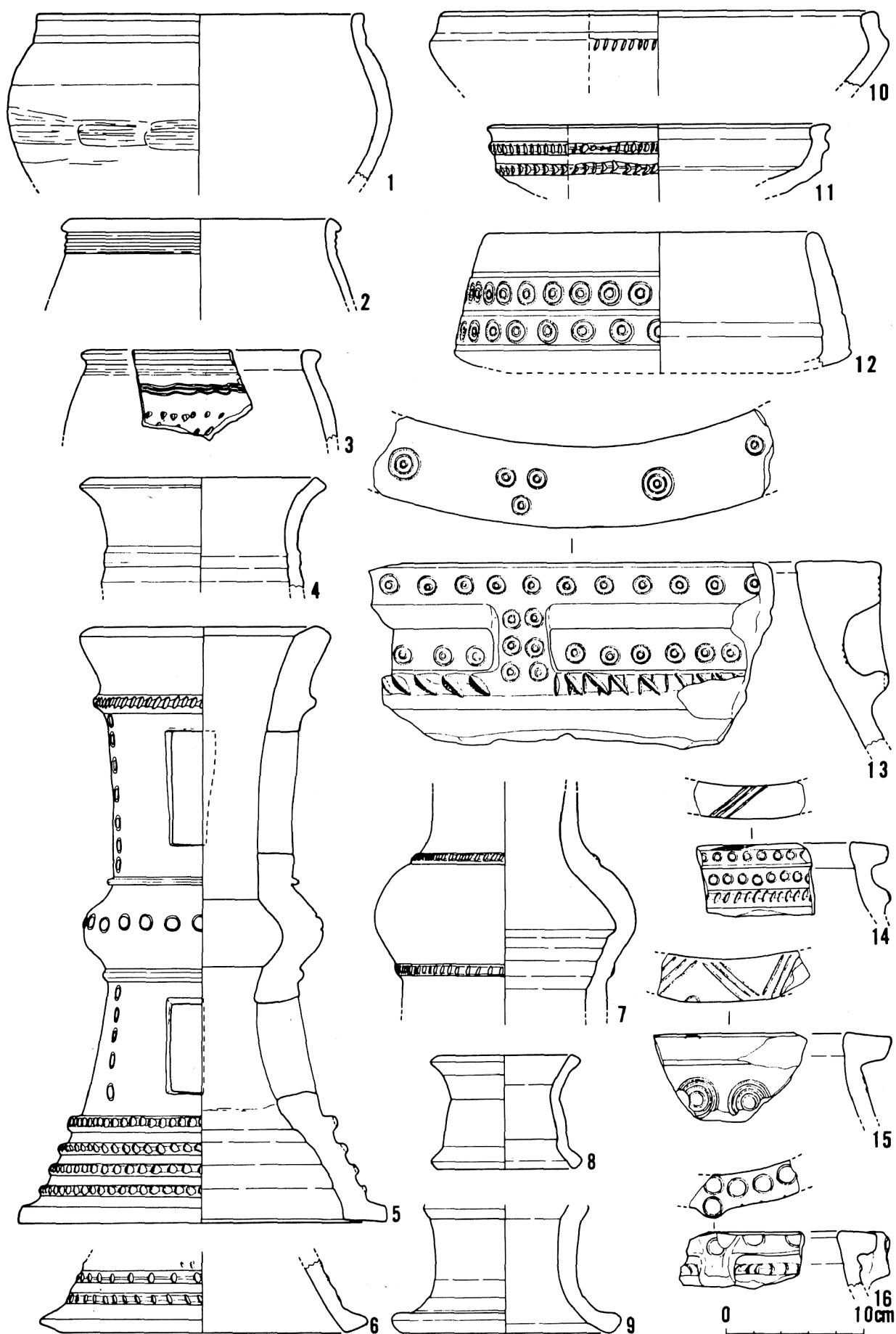


Fig. 7. A selection of the pottery from Area A in 'Usiyeh.



Fig. 8. Terra-cotta figurines from Area A in 'Usiyeh.

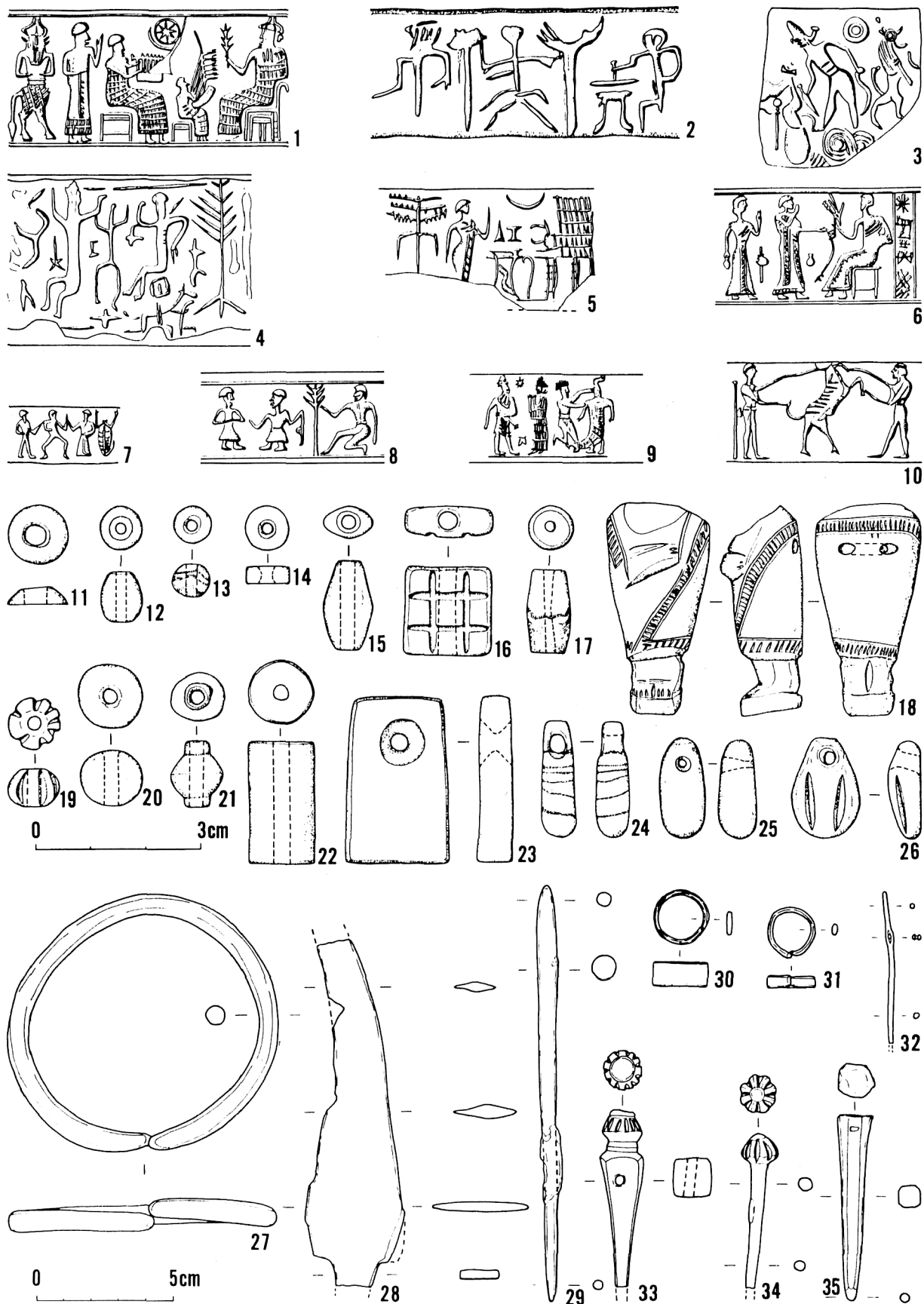
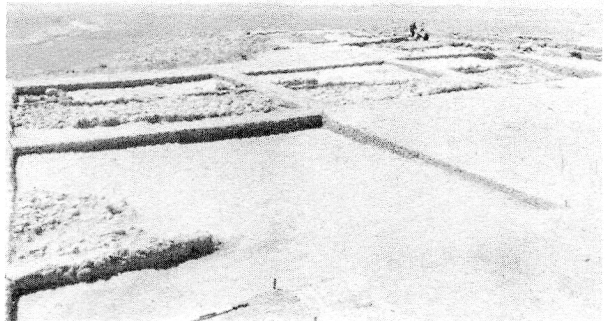


Fig. 9. Cylinder seals, beads and bronze objects from Area A in 'Usiyeh.



1. A part of Stone wall C looking from the east.



2. A part of Stone wall B looking from the east.



3. Dug pit of stone structure looking from the south.



4. Stone structure looking from the north-east.



5. Stone structure looking from the north-west.



6. Original plan of stone structure looking from the south-west.



7. General view of Area A looking from the east.



8. Reused plan (the first stage) of stone structure looking from the south-west.

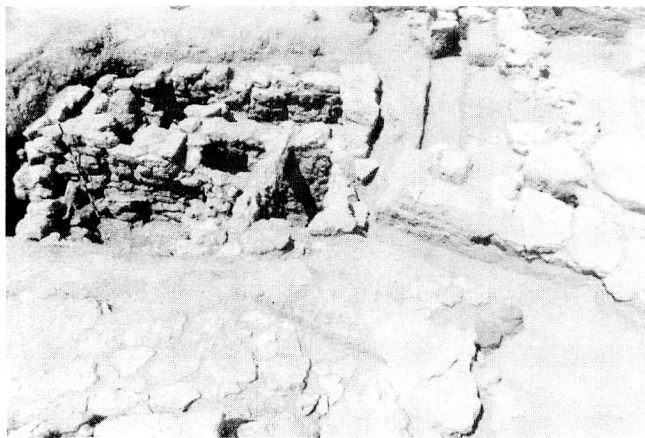
Fig. 10. Structures of Area A in 'Usiyeh.



1. Reused plan (the last stage) of stone structure looking from the south-west.



2. Room RS of stone structure from the north-east.



3. Stone structure (lower level) and the other structures looking from the east.



4. Paved stones looking from the south.



5. Drain looking from the south-west.



6. Entrance of the RW looking from the inside.

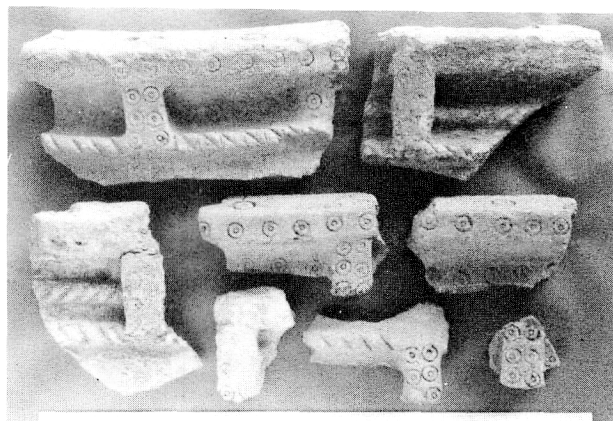


7. Gypsum floor remained a corner of the RN.

Fig. 11. Structures of Area A in 'Usiyeh.



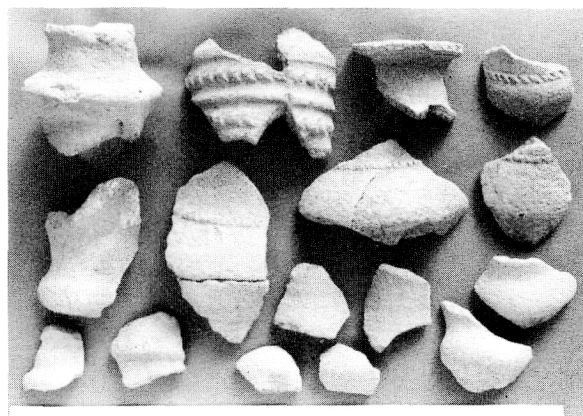
1. Incised and white-filled grey ware.



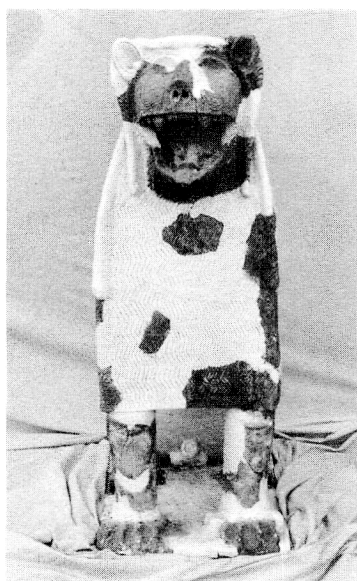
2. Incised sherds selection.



4. Terra-cotta lion (life size).



3. Potstand sherds selection.



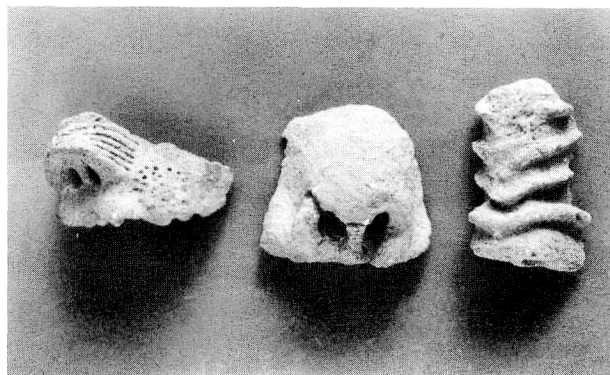
5. Terra-cotta lion (life size).



6. Female terra-cotta ware.

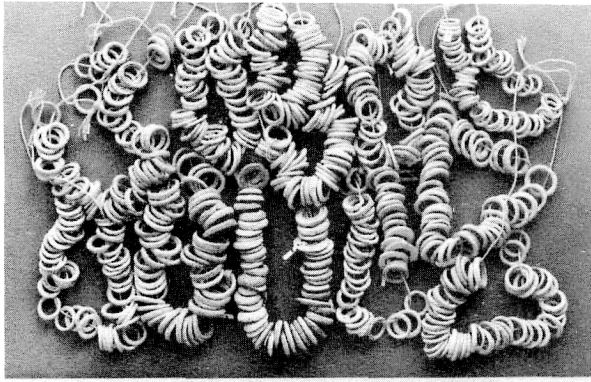


7. Small terra-cotta lion.

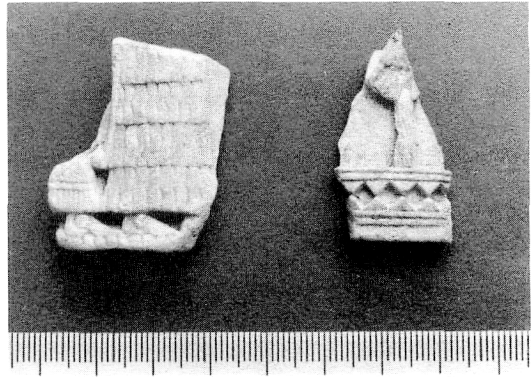


8. Parts (noses) of animal terra-cotta figurines.

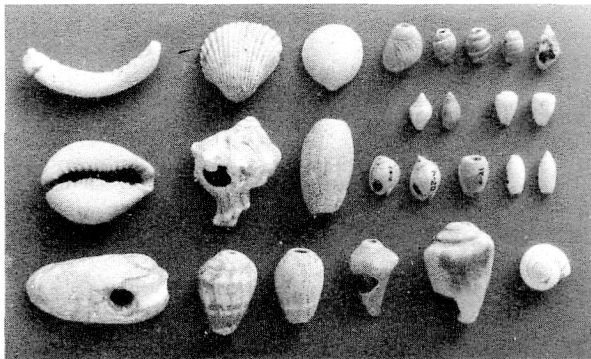
Fig. 12. Pottery and terra-cotta figurines from Area A in 'Usiyeh.



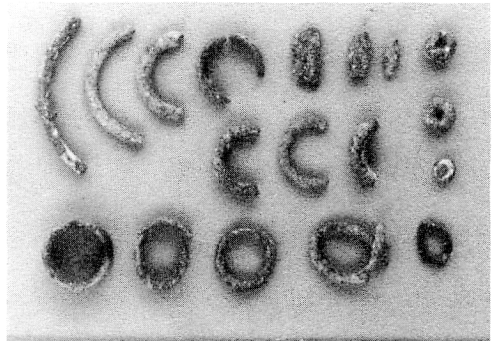
1. Shell beads.



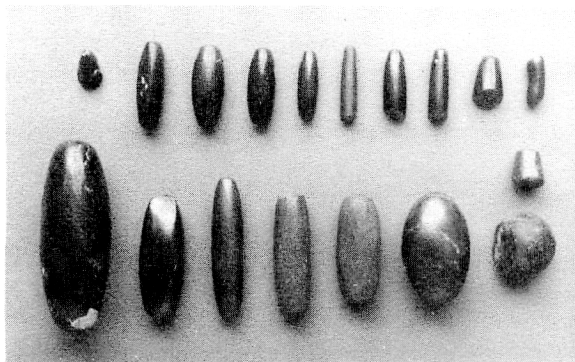
2. Parts of stone relief.



3. Various kinds of shell beads.



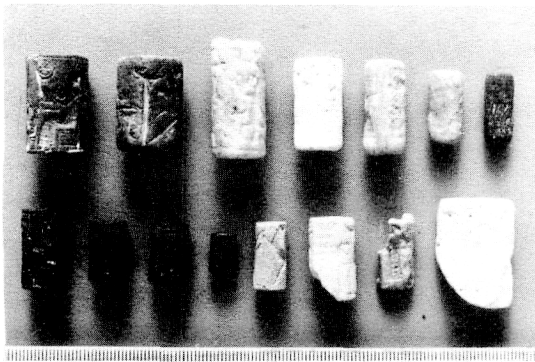
4. Bronze rings.



5. Weights.



6. Various kinds of stone beads.



7. Cylinder Seals.



8. Ivory mask.



9. Frit mask.

Fig. 13. Other objects from Area A in 'Usiyeh.

Ⅱ. B 区

B区はA区から北へ約 250m, マウンド・オウシーヤから北西へ約 800m の地点に位置し, ここには二つの墳丘, マウンド1とマウンド2がある。この地点から北西へ約 100m には, 初期王朝Ⅲ期の遺構とされるイラク隊の調査した地下式石室が所在する。¹⁾ マウンド1, 2は, 丘陵尾根上に位置し, 東側をマウンド1, 丘陵端部に近い方をマウンド2とした。これらの南側はワジに下る崖になっている (Fig. 14)。

1. マウンド 1

マウンド1は直径約 15m, 高さ約 1m を測る円形の低い墳丘である。墳丘の頂部は径約 4m にわたって削平された形跡があった。最近のテント設置跡と思われる。発掘にあたっては, まず墳丘の中心部に調査区画の基準点を設定し, 南北に長さ 10m, 幅 2m のトレンチを2本設けた。遺構確認後, 徐々に発掘範囲を拡張した (Fig. 20-1)。

墳丘を断ち割った際に観察した層位の概要は以下のとおりである (Fig. 15)。

- 1) 地山の表層は石膏の結晶が非常に発達した硬質の土で, 礫をほとんど含まないが, より下層は砂礫となる。墳丘外ではこれがそのまま現地表を形成する。この面の直上に厚さ 3~5cm の粘質土があり, 墳丘の基底をなす。この層は, 土質が他の層と全く異なることや, 薄く一様に広がる状況から判断して旧地表に由

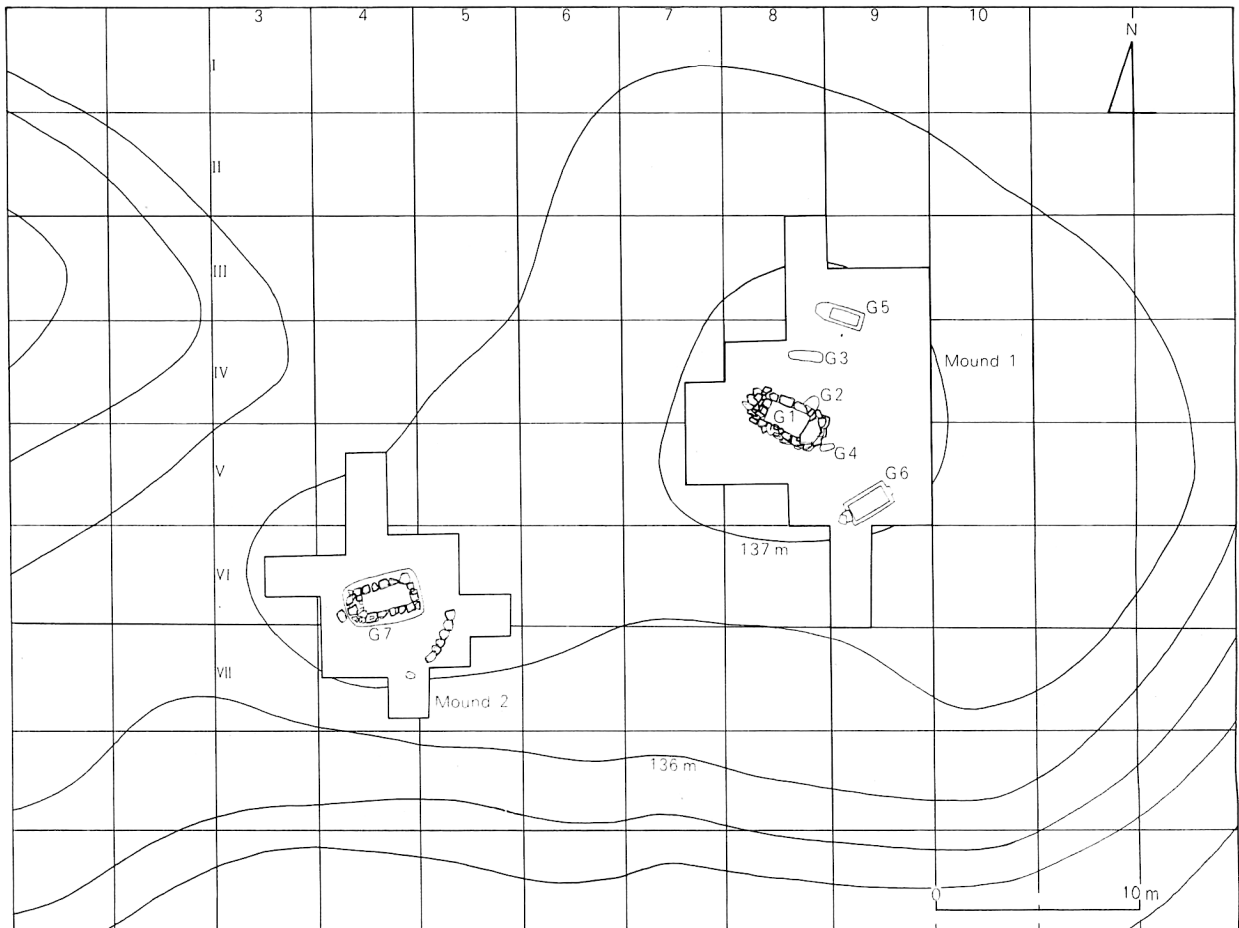


Fig. 14. 'Usiyeh, area B

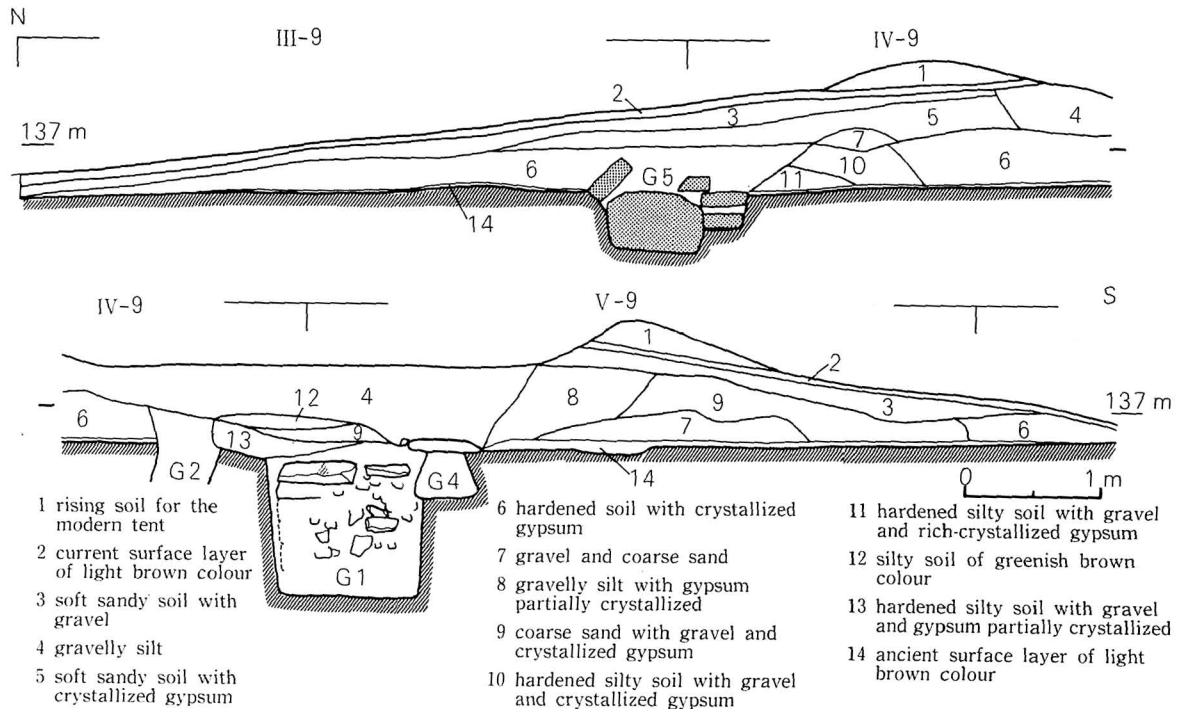


Fig. 15. North-south section of Mound 1

来すると判断した。この上にある盛土は、少量の砂礫と石膏結晶を含む硬質の砂質土と、砂利を多量に含み石膏結晶が若干認められる程度の軟質土に大別できる。

2) 南側では、砂礫を多量に含む層が北側に比べて多くを占めており、その部分が、墓 G1 の石室のための掘方を設けた際の排土であった可能性が高い。墳丘中央部は砂礫を含んだ石膏結晶のない軟質の土で占められる。この層は均質でなく、墓 G1 の石室内部を埋めていることから、後世における破壊ないし盗掘後に形成されたのであろう。

3) 墓 G2, G4 の掘方は、明らかに旧来の封土を切込んでおり、これらの墓が最初の墳丘形成時期以降に営まれたことを示す。

検出した遺構はすべて墓である。この墳丘の主体をなす石積み墓 1 基 (G1)、石蓋土壙墓 3 基 (G2, G3, G4)、日乾燥瓦造墓 2 基 (G5, G6) の計 6 基である。

墓 G1：唯一の石積み墓である (Fig. 16, Fig. 20-2)。盗掘を受けたらしく、天井石は奥壁上部に 150cm×80cm×20cm の石が一枚残存するのみであった。石室の西から南にかけての外周には、20~40cm 大の石が多数散乱し、室内は砂質土や大小の礫で埋めつくされていた。これらの土石は西壁から奥壁に向かって傾斜して堆積しており、自然に流れこんだ状況を示す。

石室の床面は、長さ 2.2m、幅 1.5m の矩形をなし、天井石までの高さは 1.1m を測る。主軸（長辺）方向は N-115°-E である。石室は旧地表面から地山を約 1m 掘り込んで設けられおり、その掘方は長さ 3.4m、幅 2.5m の隅丸方形である。南側壁は、長さ 60cm 前後、厚さ 20cm 前後の平らな石を長手積みにし、徐々に内側に迫り出させて積んでいる。北側壁では、中位から上の石積みこそ現存しないが、残存高までの石積みは内傾している。

壁の内面全体には、スサを含む褐色の練土が塗り籠められていた痕跡を認める。この練土は石のすき間を封

じ、石積みの凸凹を均らす役割を果たしたものであろう。おそらく構築当初には、石積み自体はすべて隠れるように練土が塗られていたと思われる。石室の西南隅外側で、80cm×60cm にわたって同質の練土を検出した。旧地表面上にあり、構築時に練土をこねた跡か、その置場と推定している。

東奥壁は、側壁に比べて小ぶりでかつ大小差のある石を垂直に積み上げたもので、石と石の間隙に塗り籠められた練土が目立つ点は、やや雑で不安定な印象を与える。西壁外側の地山は室内に向かって傾斜しており、その上に、長さ40～50cm、厚さ20cm程度の石が、下段に3個、上段にも3個それぞれ並列して置かれ、小さな階段をなしていた。この部分は墓の閉塞に伴う施設の一部と考えられ、後に追葬が行われた可能性を伺わせる。

石室内から出土した遺物は、小型土器一点のみである (Fig. 9-1)。埋土は前述したように、後に流れこんだものと考えられ、この土器が石室構築時の埋葬に伴う遺物かどうか明確でない。この土器は非常にきめのこまかい精製された胎土を有し、器肉は非常に薄く、体部は球状をなし、口縁部はラップ状に開く。水引き痕を明瞭に認め、ロクロで成形されたことがわかる。外面にはクリーム色の化粧土が施されている。底部は残存しないが、墓G5出土の土器 (Fig. 9-2, Fig. 22-2) と、胎土、手法、器形が類似しており、近似した底部を想定することができる。

墓 G2：幼児を埋葬した、石蓋を有する小規模な土壌墓である (Fig. 16)。墓壙は墓 G1 北側壁の外面に接して掘られ、南側面には G1 北側壁の石積みの外面が露出している。深さは G1 北側壁上面から 65cm を測る。墓壙基底面は長径 70cm、短径 60cm を測る。墓壙の主軸、すなわち遺骸の頭方向は N-123°-W である。墓壙上面には平らな 5 枚の蓋石を架けわたし、これらの石のすき間を小石や土器片でふさいでいた。蓋石の南側 2 枚は G1 の北側壁の上面にかかる。墓壙内では、乾燥したサラサラの砂質土が蓋石下面から 20cm の深さまで堆積して遺骸を覆い、遺骸に間近な土は暗い赤褐色を呈していた。

出土した遺物には、遺骸の脚部付近で発見した足輪か腕輪と推定される装身具と、頭部付近から採集した耳飾りと考えうる鉄製の鎖がある (Fig. 19-4・5)。土器は出土していない。前者は太さ 1mm の青銅製の線を撚って紐状に作られたもので全長 14cm を測る。中央部が最も太く、両端方向に徐々に細くなる。一方の端部には小環を、他方には鉤状の留金を作っている。後者は残存長 2.6cm、耳飾りらしいが装着部分の細工は残っていなかった。径約 1cm の環 6 個からなるが、端部は 3 個の環が房になって隣の環に掛かるので、鎖としては 4 連である。錆の付着が著しいため、環表面が鍍金されていたかどうかは確認できなかった。

墓 G3：石蓋を有する土壌墓である。墓壙の横断面はフラスコ形を呈し、基底面は長さ 1.7m、幅 0.4～0.5m、蓋石下面からの深さは約 0.5m である (Fig. 17, Fig. 21-3)。墓壙全体に架けられた蓋は 6 枚の平らな石からなり、これらの石のすき間を小石でふさいでいた。墓壙の主軸は N-86°-W である。サラサラの砂質土が石蓋付近まで詰まっていた。被葬者は成人で、頭をほぼ真西に置く横臥伸展葬である。骨は完存しており、顔面は北を向く。遺物はまったく出土しなかった。石蓋を据えた面は現地表より低位にあるが、元来は墳丘上面から 2 段に堀り込み、その下段をここである墓壙とした可能性が強い。よく保存された遺骨のほかにはなにも出土しなかった。

墓 G4：石蓋を有する土壌墓で、墓 G1 奥壁南東隅の外側に接して設けられていた (Fig. 17, Fig. 21-1)。主軸は N-107°-W である。墓壙の基底面は長さ 70cm、幅 40cm、深さは 35cm を測る。横断面はフラスコ形を呈する。上部を 3 枚の平らな石が覆う。壙内の埋土は墓 G2, G3 と同様の砂質土であった。遺骸は横臥屈葬され、頭

位は南西側にあって顔面は北西を向く。完存していた遺骨からみて、被葬者は墓 G2 よりなお小さな幼児である。遺骸の首周辺より24点のビーズが出土した。そのうち2点のみは穿孔された貝殻で、他は円筒形、円盤形、南瓜形などを呈する径約8mm から4mm のガラス製ビーズである (Fig. 6-6~28)。土器は一点も出土しなかった。

墓 G5: 日乾煉瓦を積んで築いた単室の墓である (Fig. 17, Fig. 21-2)。墓室は長さ 1.6m, 幅 0.7m で長方形をなす。床面から天井部までの高さは 50cm 前後と推定される。主軸は N-105°-E をさす。地山面を掘り込んだ後に、煉瓦をその掘方に沿わせて積み上げている。奥壁は、36cm×18cm×11cm の煉瓦を、床面から長手積みにし、両側壁も、床面から2~3段目までは奥壁と同寸法の煉瓦をやはり長手に積むが、その上に 36cm×36cm×11cm の煉瓦を図の如く縦置きにして並べる。天井部は崩落していたため断定はできないが、東奥壁に接する3枚の縦置きの煉瓦から、切妻屋根型の架構を想定できよう。²⁾ 西妻壁は煉瓦の目地が明瞭でなく積み方も判然としなない。断面の状態からみて、埋葬後に閉塞された部分がここであったと推定している。

室内には計3体の被葬者が認められた。北東隅からは原形をとどめない頭骨を含む1体分の人骨が出土した。他の2体は床面中央から西壁にかけて並列されていた。共に成人よりはやや小さな骨格をもち、頭部は東側に位置する。骨の遺存状態は悪い。南側の1体は、腕の位置からみて顔面は南向き、北側の1体は顔面北向きであった。奥壁側の人骨は、原形をとどめていないために、埋葬時の位置を保っていないと推定され、他の2体を埋葬する際に奥に押しやられたものとみなしうる。これがこの墓における最初の埋葬と考えてよい。他の2体には、時期差とよぶほどの隔たりがあるとは思えない。

人骨以外には、小型壺が奥壁付近の床面直上に倒れた状態で出土したのみである (Fig. 19, Fig. 22-2)。その小型壺は口径 6cm, 器高 10.6cm, 最大径 7.6cm を測る。緑灰色を呈し、微砂粒を若干含む精製された良質の胎土をもつ。内壁にロクロ目を明瞭に留める。口縁部はラッパ状に開き、頸部は深くくびれる。体部は卵殻状をなし、底部にかけて極端に窄まる。器肉は体部で非常に薄く、その下部から底部までは厚い。平底の下面は静止糸切りの痕跡を留める。出土位置からみて奥壁側の人骨に伴う副葬品と考えられる。

墓 G6: 墓 G5 と同様の造りをもつ日乾煉瓦で築かれた墓である (Fig. 17, Fig. 21-4)。天井部は完全に失われている。墓室床面は長さ 2m, 幅 0.9m の長方形をなす。主軸方向は N-36°-E である。四壁は 36cm×18cm×11cm の煉瓦を長手に積み上げている。壁の残存高は両側壁、西妻壁ともに約 30cm, 東壁で約 70cm を測る。西壁上端から外側地山面にかけて 50cm×40cm 大の石2個を階段状に積む。閉塞する側特有の施設の一部と想像される。遺物としては床面上から人骨片数点が出土したのみであった。

2. マウンド 2

マウンド1の南西約12m, 丘陵舌状部の先端、マウンド1よりも約1mほど比高の低い地点にマウンド2がある。直径約10m, 高さ約0.7mを測る。墳丘の中心から南北に幅2mのトレンチを設定し、後にこれを掘げた (Fig. 14)。

検出した遺構としては、墓 G1 と同形式の石室1基とそれを取り巻いていたらしい石列の一部がある。石室の天井石、壁石の大部分は取り去られており、ほとんど石積みの最下段が残存するだけであった。(Fig. 18, Fig. 22-1)。その掘方は長さ3.8m, 幅2.3mの隅丸方形をなす。主軸方向は N-76°-E である。旧地表面からの深さは0.7~1.0m。西妻側では、2段目と3段目の石を最下段の石の外側に迫り出させて置いている。これも閉塞部

分特有の施設の一部であったろう。この石積みの下, 最下段の石と掘方面との間には, 多量のこぶし大の石が詰められていた。石室外, 南東側の表土直下に 50~60 cm の大の石 6 個が円弧状に並んでいた。これらの石は旧地表面上にある。構築当初には墳丘の外周を円形にとり巻く石列が設置されていたのであろう。

床面直上から数片の人骨が出土した以外に, 石室内から出土した遺物はないが, 室外にある石列のすぐ外側の旧地表面上から, 口縁部の破損した壺が 1 点のみ横に倒れた状態で出土した。この土器は赤褐色を呈し, 比較的にこまかい胎土を有する。外形は不整形で, 特に体部は見る角度により形が違ふ。底部は非常に厚い。下面にはヘラ状工具による切りはなしの痕があり, 中心部にボタン状の突起を留める (Fig. 19, Fig. 22-3)。

3. 小 結

マウンド 1 からは石蓋を有する土壙, 日乾煉瓦積み, 石積みという三種の埋葬施設を検出した。これらの墓に関して時期および構築順序について考えてみよう。

石蓋を有する土壙墓 G2, G3, G4 はいずれも同様の構造をもつ。すなわち掘方を 2 段につくり, 下段の底面に遺体を埋葬して石蓋で覆う。墓壙内の埋土はしまりのないサラサラの砂質土である。この墓の造りは現代のイスラム墓と若干の差異はあるが極めて類似する。また, G2, G4 が墓 G1 の石積みを一部利用している点は, G2, G4 の設営時にすでに墓 G1 が露出していたことを暗示する。これらの観点から, 3 基の石蓋土壙墓は比較的新しい埋葬にちがいない。年代を決定するような遺物に乏しいのでその時期を判定することは困難であるが, 青銅製品や異形のビーズなど, 出土した装飾品にはイスラム期よりやや遡る要素が伺える。

墓 G5, G6 と同型式の日乾煉瓦積みの造りをもつ墓は, マウンド・オウシーヤを中心としてほぼ 1 km 四方にわたるオウシーヤ遺跡内に約 80 基ほど点在している。これらは丘陵の尾根上に築かれ, 径 5~10 m, 高さ 1~2 m の墳丘を有する。イラク隊により約 30 基が発掘調査されているが, 墓室の規模は長さ 2~3 m を測るものが大部分で, 天井部はすべて切妻屋根形をなす。またほとんどの墓室には 2 体以上の被葬者が認められる。G5, G6 は中でも最小の規模である。表土から 30~40 cm の深さで遺存する煉瓦積みの上端を検出したことから, 固有の墳丘はなかったとみなしうる。墓 G1 に伴う封土を, G5, G6 の築造者は直接利用し, 墳丘を築く手間をはぶいたのであろう。マウンド 1 周辺には, これら 2 基以外に日乾煉瓦造の墓は他に現存せず, イラク隊が発掘調査した地下式石室の上層部に, 墳丘を有した日乾煉瓦積みの墓を検出したことを聞くのみである。³⁾ その地下式石室と B 区, A 区は一連の尾根上に位置し, この範囲では, 日乾煉瓦積みによる墓は G5, G6 以外にはほぼ存在しないのである。したがって, マウンド 1 に日乾煉瓦造墓が営まれるにはある固有の事情があったと考えられ, それらが墓 G1 の被葬者と何らかの関連があったことを示唆する。

墓 G5 出土の小型土器は, 前 1600 年ごろと推定されるヌジ出土の土器に類似する。⁴⁾ イラク隊が調査した多数の日乾煉瓦墓からは, 古バビロニア期に比定される土器およびその時期の円筒印章が出土している。⁵⁾ さらにハディーサ地域では, おびただしい数の日乾煉瓦造墓が存在しており, これらの墓もその年代にあてて見解が出されている。⁶⁾ 以上の諸点から G5, G6 の墓も古バビロニア期の築造とみなしてさしつかえない。なお, 日乾煉瓦に用いられた粘土は, 緑灰色を呈しかつ微砂粒を多量に含むという特色がある。これと同質の土は近隣のユーフラテス河岸の随所で厚い堆積層を成しており, 容易に採取することができたであろう。

墓 G1 はマウンド 1 の主体をなし, 6 基の墓のうち最も古い。マウンド 2 で発掘した墓 G7 も, 規模や造りの点で G1 ときわめて類似する石積み墓である。追葬可能な構造であったらしい点からみて, おそらくは家族墓で

あったろう。ほかにオウシーヤ地区にあって石室を有する遺構としては、形式や規模は異なるが、北西側に位置するイラク隊発掘による地下式石室、南側A区のやはり地下式石室のみである。前者からは初期王朝期の土器が後者からはイシン・ラルサ期の土器や小品が出土しており、それぞれの石室の構築年代をそれらの時期とすることができる。G1, G7の石室からは年代を決定するような遺物を見ないが、石の積み方、土による上塗りなど構築方法には部分的に他の二つの地下式石室と類似する点があり、G1およびG7の構築期をそれらに近い年代にあてたい。ただマウンド1の方が、より高いという立地条件に勝る地点に位置しており、G1の方が先に築造された可能性が強い。以上すべての石室はオウシーヤ地区の中で最も見晴しの良い同一の尾根上に位置する。前述したように、この範囲に設けられた日乾煉瓦造墓はごく稀であることから考えると、この尾根は石積みの埋葬施設を営む場所として専ら利用されたのであり、その時期もある程度限られていたのであろう。

墓 G1, G7 と同形式の石室墓は、オウシーヤ遺跡からユーフラテス川の下流約 30km の地点に所在するシュワイミーア Shuweimiyeh 墳墓群においてイラク隊によって1基だけ発掘されているほか、⁷⁾ シリアのユーフラテス川流域には多数分布している。⁸⁾ 一方、G7 のように墳丘の外周を取り囲む石列を有する石室墓は、シリア領内にあるほか、オマーンのフィルク Firq 地区に事例がある。⁹⁾ フィルクの墳墓は径約 28m、高さ 2m の墳丘の外周に2段積みの石列がサークル状にめぐる。埋葬施設は竪穴式の石室と推定されている。

ところで、G1, G7 の石室は明らかに死者の遺骸を葬るために築かれたもので、他の用途は考えられない。しかしイラク隊の調査による初期王朝期と推定される遺構、およびA区の地下遺構は、ともに複数の石室を有しながら、豊富な出土品にもかかわらず人骨を一点も出土していない。前述したように、これらの地下式石室と G1, G7 とは同一尾根上に位置しており、ある時期の一連の埋葬に伴う施設であることは疑いない。ただ二つの地下式石室は、必ずしも被葬者自体をそこに安置したとみなす必要はないのかもしれない。しかし、この時期にそうした慣習が存在したという根拠は今のところない。いずれにせよ G1, G7 と他の二つの遺構とは密接な関係にあったにちがいない、初期王朝期と称される石室とA区の石室それぞれが詳細に解明されることこそ、出土品の乏しいマウンド1およびマウンド2の鍵を解く手がかりになるにちがいない。(岡田保良, 沼本宏俊)

注

- 1) *IRAQ*, Vol. XLIII (Autumn 1981) 所収, 'Excavations in Iraq 1979-1980', 'Usiyeh' の項。
- 2) オウシーヤ遺跡で発掘された日乾煉瓦造墓の天井部はすべて切妻屋根形をなす。
- 3) イラク人調査官マジード氏より伝聞した。
- 4) バスラ博物館に同様の土器が陳列されている。出土地 Nuzi とあった。
- 5) 日乾煉瓦のサークルを有する煉瓦造墓から出土したという。マジード氏の教示による。
- 6) フランス隊オリバー氏による見解である。
- 7) *IRAQ*, Vol. XLIII (Autumn 1981) 所収, 'Excavations in Iraq 1979-1980', Shuweimiyeh の項。
- 8) Baguz: M. du Buisson, *Baghohz* 30ff, Har Jeruham: M. Kochani, *IEJ* 13 (1963)。
- 9) *Excavation and Survey in Oman, 1974-1975*。

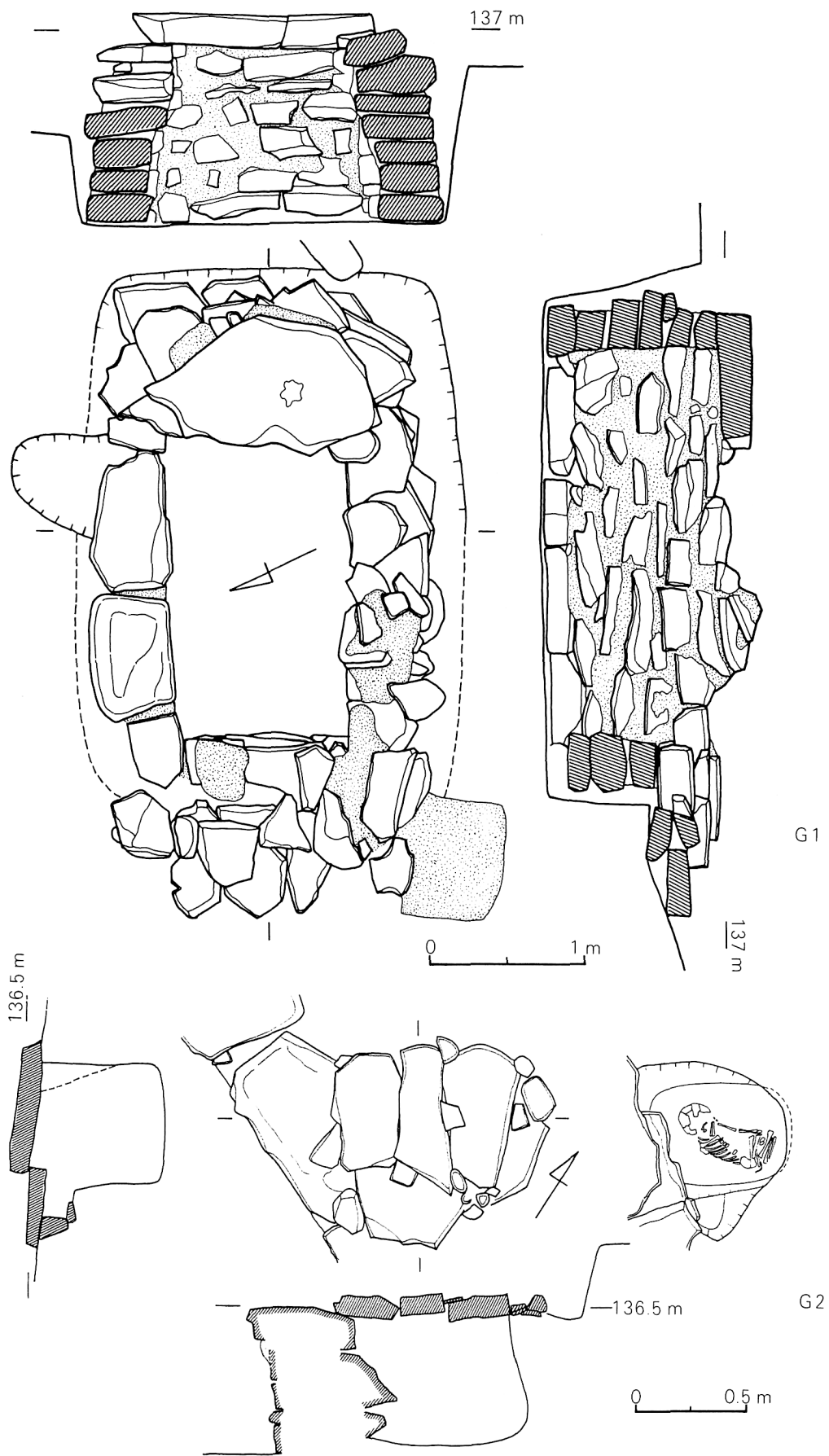


Fig. 16. Details of G1 and G2

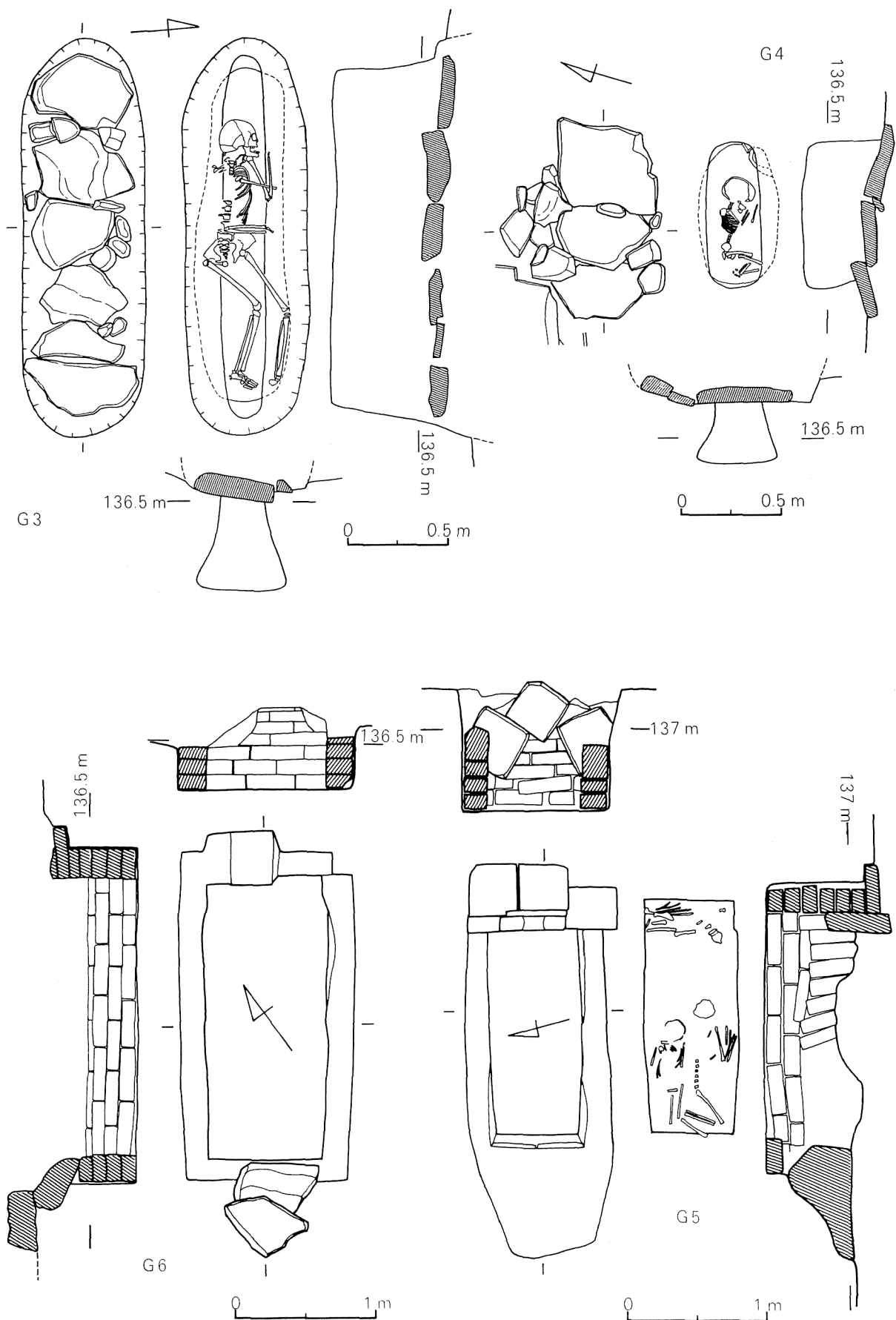


Fig. 17. Details of G3, G4, G5 and G6

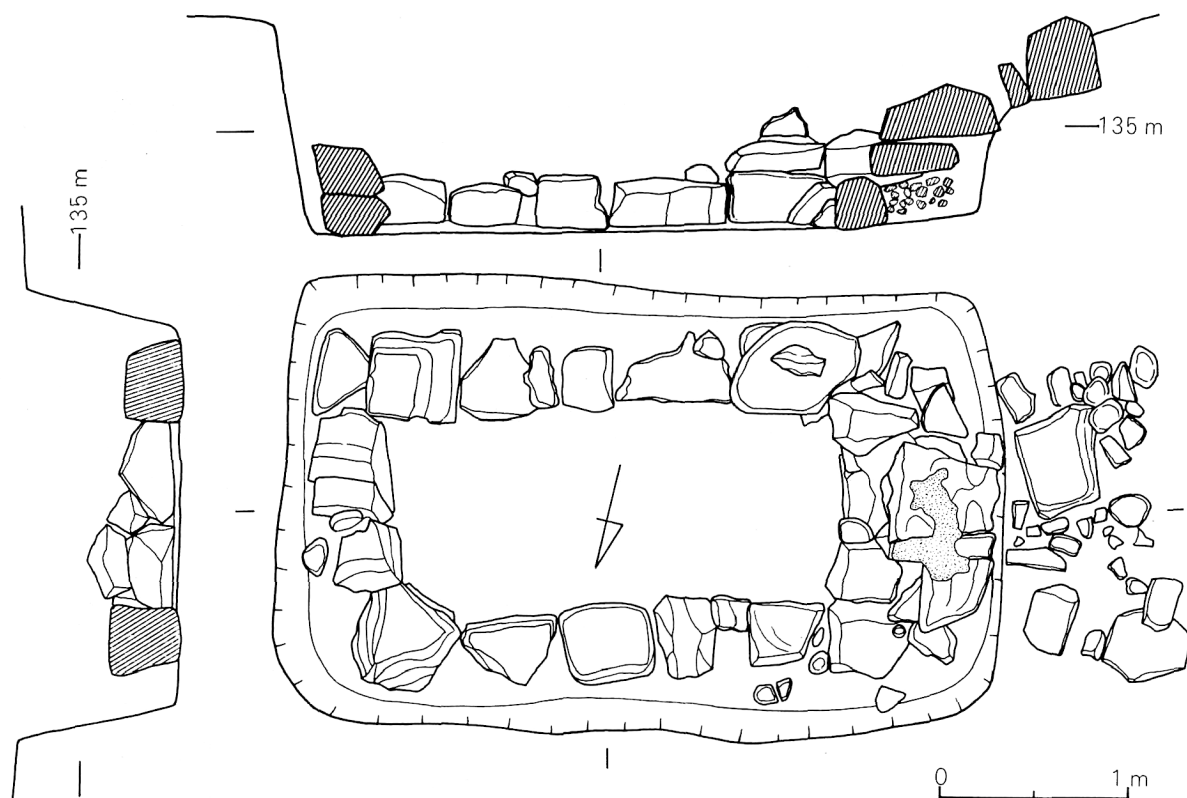


Fig. 18. Details of G7

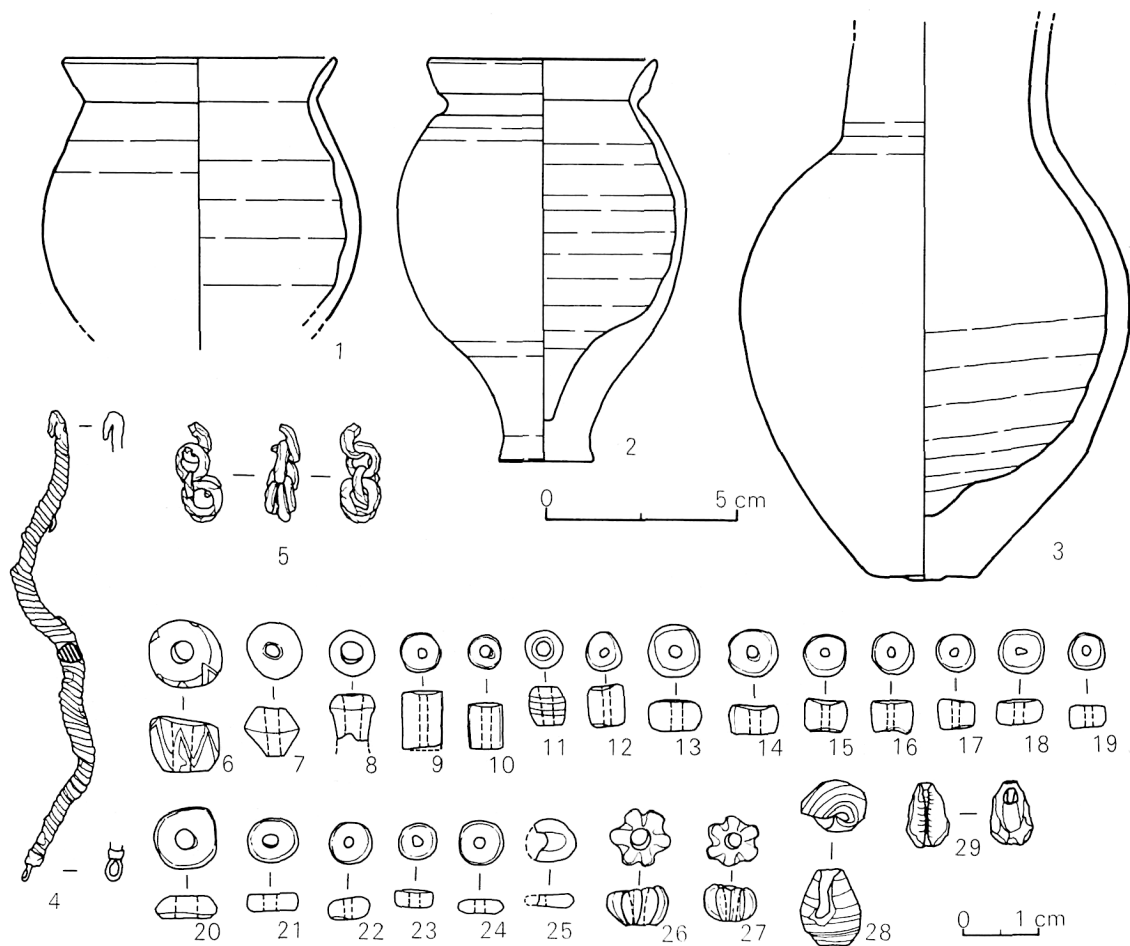
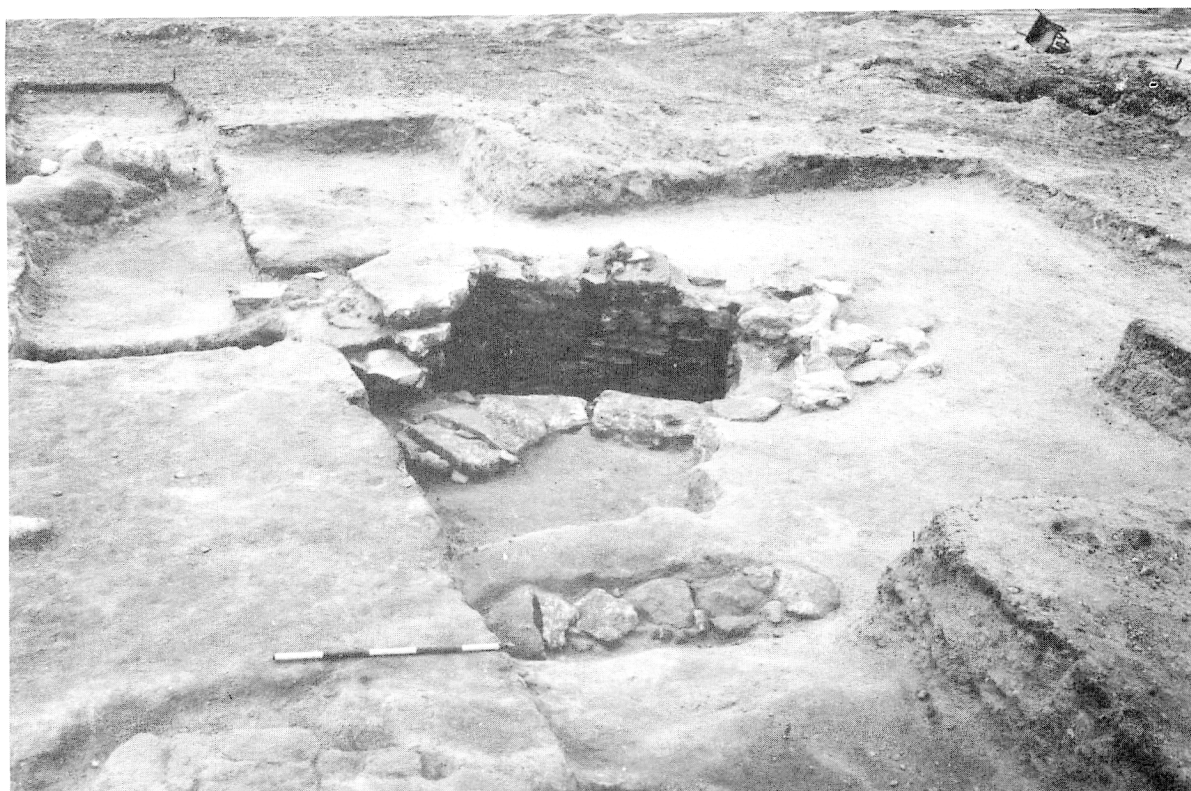


Fig. 19. Findings from Area B (1; G1, 2; G5, 3; Mound 2, 4-5; G2, 6-28; G4)



1. Excavated area of Mound 1, from the north.



2. Grave G1

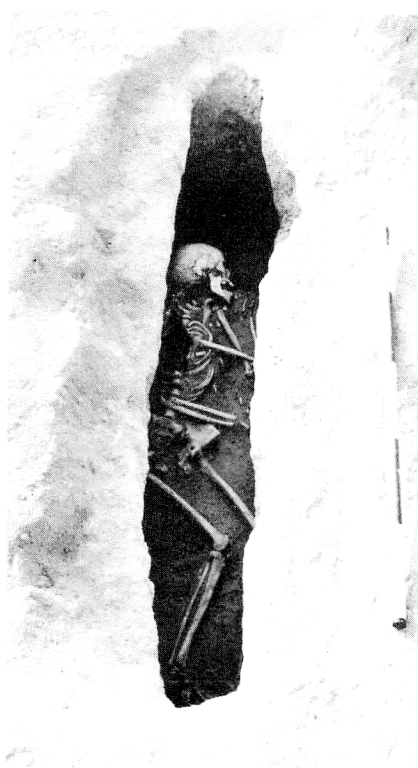
Fig. 20. Structural remains at Mound 1



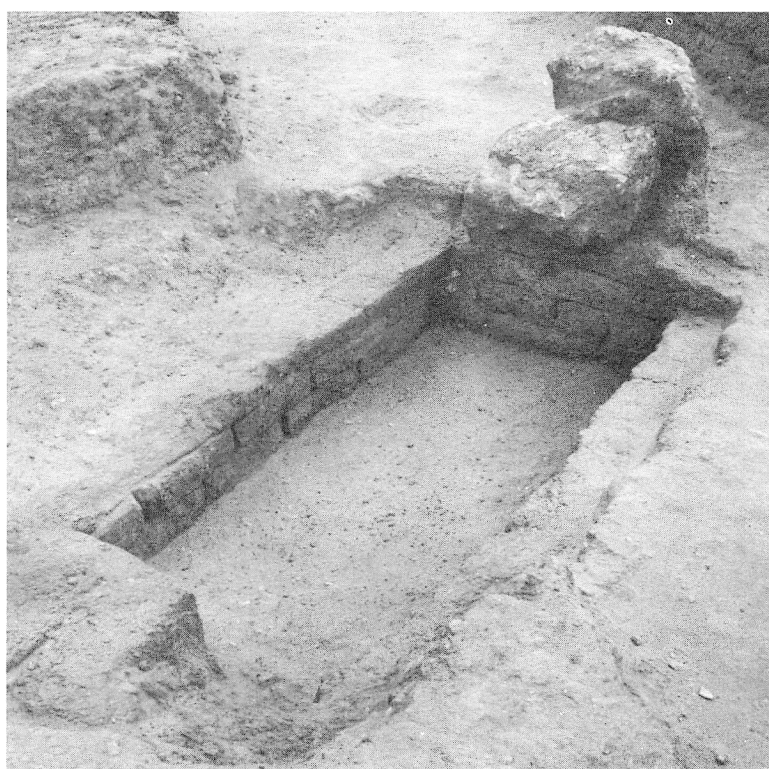
1. Grave G 4



2. Grave G 5



3. Grave G 3

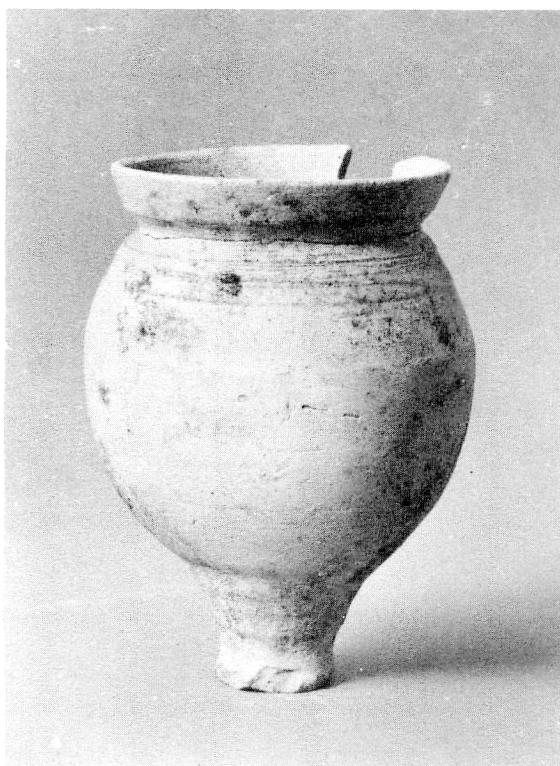


4. Grave G 6

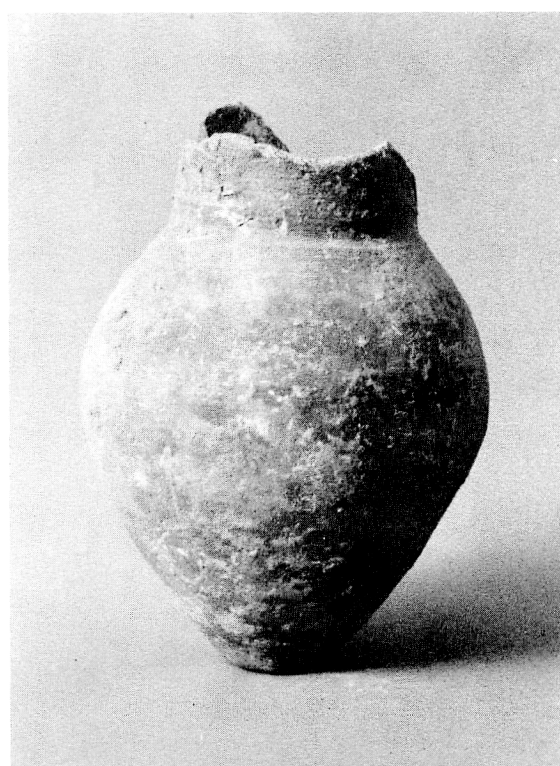
Fig. 21. Graves at Mound 1



1. Grave G7



2. Small vessel from G 5



3. Pot from Mound 2

Fig. 22. Mound 2, and pottery unearthed